
時旅～トキタビ

野草家店長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時旅〜トキタビ

【Nコード】

N7914F

【作者名】

野草家店長

【あらすじ】

謎のロボット時斗と、主人公零斗が様々な時空・世界を訪れ悪の根源を倒す予定のお話です。→もうちょっとしたら、まともなあらすじになると思いますー。※ただ今、全話書き直し中です。ひょっとすると、かなり中身が変わるかもしれません。その時は一からよろしく願いしたりします。7月27日

プロローグ

それは、僕の今までの人生でずっと宝物だった。

高校生まで生きていれば、いくつか宝物や、大事な物が出来てくる。

しかし、そのほとんどは成長する間にガラクタに思えてきたり、無くなったりするものである。

でも、それは無くならず、ずっと傍にあった。

自分でも不思議なくらい肌身離さず持っていた。

その“石”の力も知らずに：

僕が住んでいた所は、田舎だった。

コンビニもなく、あるのは小さな八百屋兼魚屋ぐらいで、住民もかなり少なく数十人ほど。

その中で子供は、十人と満たない。

でも僕は、不便とも不自由とも思わなかった。

自然が満ち溢れ、毎日暗くなるまで友達と遊んでいた。

そして僕が七歳の時にそれを拾った。

かくれんぼの最中、僕は森で一番大きい樹に登った。

その樹は村では、神木様かみぎと言われている何百年に一回光り輝くという。

そして神木様の頂上辺りで、僕はそれを見つけた。
色は見事な漆黒で、鈍い光を放っていた。

これ：なんだろう？

と思いながらも僕はそれをポケットに入れた。

そして僕はそれを、誰にも話さずに自分だけの宝物にしようと思った。

何故だかわからないけどそうした方が良いと思ったからだ。

それからしばらくして村を、ダム建設の為捨てる事となった。

よくある話いだ。

当然僕らは、村を出て近くの街に住む事になった。

それから九年：

最初は、初めての事ばかりだったが九年も経てば慣れるもんだ。

僕は16歳になり高校二年生なのだが、通っていた高校が突然廃校となり少し離れた陣代高校に通うため一人暮らしを始める事に。

……そしてここから僕の物語が始まる。

第一話…坂井零斗

〃〃零斗の実家〃〃

「ふ〃…荷物はこれで全部かな？」

一人暮らしを始めるため僕は、実家の私物をまとめていた。

「宝物も持ったし…あとはどのプラモを持っていこうかな…」
街に来て僕はロボットアニメにどっぷりとはまっていた。

いつも、

「ロボットは男のロマン！」と周りから呆れられるぐらい豪語している。

何故ならロボットは男のロマンだからだ！！

さてと、前置きはこれぐらいにしてと…

〃〃主人公紹介〃〃

名前は、坂井零斗^{さかい れいと}

成績は中の下、運動オンチではないが得意と言うわけでもない。

どこにでも居そうな高校生だ。

ただ、反射神経だけは良く、手先は器用な方で将来は^{アーム・スレイフ}ASのメカニックになろうと夢見ている。

ASとは強襲機兵とも呼ばれ、細かい説明は抜いて、簡単に言うと現在の『陸上最強兵器』である。か三年で軍の主力兵器になったのだ。ASが始めて公表された時、僕はあまりの感動と興奮で、その場で気絶したらしい。

まあ、また話しが長くなったけど、それほどまでに僕は重度のロボットオタクなのだ。

だからAS関係の仕事に就けるなら僕は死んでもいい！って事だ。

いや物のたとえで本当は生きたいです！

……というわけでそろそろ出発だ。

引越先にはもう生活に必要なものは送ってあるから、後は、このまとめた荷物を担いで自転車で向かうだけだ。もちろん担ぐ荷物の大半は趣味の物である。

第二話…引っ越し完了？

〃〃零斗の実家（玄関）〃〃

「では坂井 零斗、行ってきました！」

僕は家族に敬礼をして家を出た。

〃〃路上〃〃

引越先は、これから通う陣代高校から約1Kmほど離れたマンションだ。

自転車を通うには近い距離だ。

しかし不安なのが僕が行くクラスになんでも、問題軍事マニアがいるらしく、僕が前に行っていた高校にもたまに情報（噂）が入ってきた。

どういう人なのかと好奇心はあるが、正直不安である。「まっ、どうにかなるよね」自転車こぎながら僕は呟いた。

〃〃マンション〃〃

「これぐらいでいいか。」

マンションに到着し、あらかた片付けを終えた僕は、次になにをしようか悩む。

「うーん…とりあえず夕飯の材料を買いに行くか、それとも近所の人に挨拶をしに行くか…あっ、でも挨拶に行くのに、なにも渡すものがないな、しょうがないタオルでも買いに行くかな。」

ということで買い出しに行くことにした。

〃〃路上〃〃

近所のスーパーに向かう途中青い髪をした女の子とすれ違う。（ん？へー綺麗な子だなあ…）

なんて思い、振り返ると…

ドンッ！

青い髪をした女の子が、いかにもそっち系（極道）の人とぶつかった。

（というよりそっち系の人がぶつかった）

「イッテ！おいおい、ねえちゃんどこ見て歩いてんだ？おかげで腕が折れちゃった！」

（うわー、古くさい絡み方だなー）

とか思いながらも、あの女の子が危ないと思った……が

「はあ？そっちからぶつかってきたんでしょ！」

それになによ！その古くさい絡み方は！」

と女の子がそっち系の人に臆する事なく対抗している。
だが

「なんだと！？このガキア！！」

そっち系の人が拳を振り上げる。なんともキレやすい。

（！！危ない！！）

僕がそう思った瞬間…

そっち系の人が吹っ飛んでいた。

「えっ？」

僕は、なにが起きたのか理解できなかった。

そして

「大丈夫か！？千鳥！？」

頬に傷のあるむっとり顔の青年が現れ青い髪の子に近づいて行く。

黒い銃火器のような物を持って……

第三話…噂の人物…

…路上…

(つてアレであの人を!?)

と僕が驚いて…というか恐怖していると…

「宗介! なにやってんのよ!？」

千鳥と呼ばれた女の子が叫ぶ。

どうやら二人は知り合いのようだ。

(ん? 宗介? どこかで聞いたような…)

「君に危害を加えようとした者を排除しただけだ。」

「それは…まあ有り難いけど…なにその物騒な物は!？」

「問題ない。今回はゴム弾を使用した命まで奪うような真似はしない。…：…今回はない。」

最後の一言が少し気になる。

「あーもう! いいからその人をどうにかしなさい! このまま転がしておくわけにはいかないでしょう?」

と千鳥さんが言う。

「む、わかった。」

と宗介さんが答え、白目をむいたそっち系の人を起こし(頬を思いつきり叩いて)こう言う。

「次に千鳥に近づいた時は容赦なく抹殺する。わかったか?」

「は、はい!!」

銃を突き付けられたそっち系の方は、慌ててその場を離れる。

と、この騒動を傍観していた僕だったが、いきなり

「そこのお前何者だ!？」

と宗介さんが銃を僕に向け、そう言ってきた。

「え？僕は…え〜と…その…：…さ、坂井 零斗です…」
とりあえず名を名乗る。

「坂井、いくつかこちらの質問に答えてもらう。ひとつ何故こちらを監視して…グッ！」

ズザアアアア…

宗介さんが勢いよく飛んでいった。

「千鳥…いきなりなにを…」

「普通の民間人まで被害を加えない！それに坂井 零斗君って今度うちのクラスに転校してくる人じゃない！」
巨大なハリセン片手に千鳥さんが言う。

「な、何故その事を？」 多少困惑ぎみの僕。

「そりゃあたしは陣代高校の副会長だもの。」

「ああ…そうなんですか…」

まだ頭がよく働かないが納得する。

ここでまた宗介さんが

「転校生だと？なるほど…よし質問を変える。お前はどこの組織の刺客だ？正直にはな…」

バシィィィィン！

またハリセンが宗介さんの頭を直撃する。

「アンタいい加減にしろさい！坂井君は、前の学校が廃校になったから陣代高校に転校する事になったの！」

「…千鳥、まずそういった裏工作をして周到にターゲットに近づくというケースも…」

宗介さんと千鳥さんは延々と口論している。

「あの〜そろそろ僕行ってもいいですか？まだ買い出しの途中なん
で…」

「あっ、なんかゴメンね坂井君。そうだ！宗介アンタお詫びに荷物
持ちやりなさいよ」

「いえいえ！いいですよ別に気にしてませんし。」

「いいからいいから♪宗介いいわね？」

「……………問題ない。そいつが敵かどうか見極めれるしな。」

僕は観察されるような鋭い視線を浴びせられる。

「まったくアンタは…まあいいわ行きましよう坂井君。」

「は、はい。」

流されるように僕は二人と一緒に行動する事に。

「そういえば、自己紹介が遅れたわね。私は千鳥^{ちづ}かなめ、陣代高校
二年四組、副会長よ。ほら宗介アンタも。」

「相良^{さがら}宗介^{そうすけ}同じく二年四組、ゴミ係だ。」

「や、やっぱり君が噂の相良君？」

と僕は驚きながら尋ねる。

「噂だと？」

「え〜と軍事マニアで学校にかなりの損害を出してるとか、そんな
の…」

「俺は任務を遂行しているだけだ。それに俺は軍事マニアではない、
スペシャリストだ。」

「???」

意味がわからず首を傾げる。

「あゝ、まともに相手にしない方がいいわよ、疲れるだけだから。」
確かに変わった人のようなのだ。

「相良君の任務は千鳥さんを守るって事？」

「肯定だ。」

そんな会話をしながら買い物をして、なんとか無事に家にたどり着く事ができた。

別れ際までも宗介の警戒心は解かれる事は無かった。

（千鳥さんが

「コイツに君や、さんをつける必要無いわよ。」と言ったので僕は
宗介と呼ぶ事にした。）

くくマンションくく

「今日は疲れたくく噂には聞いてたけど予想以上の人だな宗介は。
後千鳥さんもかなり度胸あるな、はくく……疲れた……」

買ってきた食材を冷蔵庫に入れてベッドに倒れ込み呟いた。
そしてそのまま熟睡。

「……グウ」

第四話…ありえない日曜日／時の守護者・時斗（前編）

〃〃マンション〃〃

日曜日、いきなり平穏な日々が急転した。

ドオオオオオオン！！いきなりの爆音で僕は目を覚ました。

「なんだ一体！？」

ベランダに出て外を見る。

「あれは…」

爆音の正体はASが建物を破壊した音だった。Rk-92 サベージ現在かなり幅広く使われているカエルのような形をしたASだ。

それが五機、街中に現れたのだ。

サベージの近くに逃げ遅れた人達がいる。

僕は衝動的に助けに行っていた。〃〃街の一端〃〃

自衛隊もサベージの進行を止めよう出動する。

しかし所詮旧世代の兵器、ASにはまるで歯がたたない。

その時既に僕は逃げ遅れた人の救助のためかなり戦闘の近くまで来ていた。

「これって非常にマズイ状況？」

すると上空で小さな爆発が起き何かが落ちてきた。

「！！なっ！！」

落下物は見たこともない白いASだった。

「これはM9？ いや…似ているけど違う…」

【M9 ガーンズバック

第三世代型ASを代表する機体。

ガーンズバックは第二世代型M6 ブッシュネルを発展させた機体で、その性能は第二世代ASとはけた違いである】

タタタタッ

そのASに乗り込む人影が見えた。

「え！？」

驚きのあまり僕は言葉を失う。

「アル、全システムのチェックは終わっているな？」終わっているな？」《ハイ、イツデモ、アーバレスト起動デキマス》

「よし、ならいい。行くぞ！」

《了解》

そのASに乗り込んだのは宗介であった。

僕は目を疑った。

昨日知り合ったばかりの（噂は聞いていたが）青年が見たことのないASに乗り込んで、テロリストに立ち向かって行ったのだ。

「アル、敵は目の前のサベージ五機だけだな？」《ハイ、周りニ他ノ機体反応ハアリマセン》

「わかった。今日は会長閣下から召集がかかっている、早めに終わらせるぞ。」

宗介が乗っているASが腰の武器に手をのばす。

おそらく単分子カッターだろう。

シュンッ！

「なんだとオ！？」

テロリストが叫ぶ。

ズシャアアアアア！

宗介の機体が、一瞬の内にサベージの後ろに回り込み単分子カッターでサベージを切り裂く。

そして隣にいたサベージも同様に切り裂いた。

「一機……二機……三機！」

あつという間に三機のサベージを倒した。

しかし…

「そ、そのAS止まれ!!」

残りのテロリストが逃げ遅れた人を人質にとっている。

「少しでも動いてみろ! そしたらこいつらを殺す!」

「……………」

「そのまま動くな!」

テロリストが外部スピーカーで怒鳴る。

（あのサベージと俺の距離が離れすぎている。人質が撃たれる前に殲滅できるか……いくらアーバレストでも間に合わないな……なら…）

「……………今『あれ』を使用できるか?」

《システム自体ハ、イツデモ発動デキマス、シカシ『アレ』が作動スルカハ、アナタ二次第デス》 「そうか…だが、やるしかない!」

宗介の機体が動いた。

「ラムダ・ドライバ発動!」

宗介がなにかを発動させたらしい。

しかし…

「くっ、作動しない! ……マズイ!」

「テメエ動きやがったなアア!!」

テロリストがASの銃火器で人質を……………撃った…
ドオオオオオオオン

「う……うわああああああ………」

人が死んだ。

さっきから戦いを見ていた僕は、今始めて人の死に直面する。

そして今まで発した事のないぐらい大きな声で叫んだ。

「うわああああああああああああ！！」

叫んでいると僕のポケットが突然光だした。

次の瞬間・・・

僕は光の中にいた。

第五話：ありえない日曜日／時の守護者・時斗（後編）（前書き）

書き方少し変えました！

大丈夫ですよ？ 誤字とかありませんよね！？

（ノ＜＞）ノ

第五話：ありえない日曜日／時の守護者・時斗（後編）

くく光の中くく

光・光しかない・でも眩しくはない・・・暖かい光・

「ここどこなんだろう？」

光の中僕は呟く。

「テロリスト達は？それとあのASと宗介は、一体どうなったんだ。」

《汝、力を求めるか？》

「？」

誰かの声が聞こえた。

《汝、力を求めるか？》

「誰？」

《汝、どんな力を欲する？》

（え？力？・・・力か：僕はあの時、あの人達を助けられなかった：自分の無力が、あの人達を救えなかったんだ・・・悔しいな・・・）
だから：

「力を持たない人達を救う為の力が：僕は欲しい！！」

《人を救う力を欲する者よ》

《我が力を授ける》

《力無き人々を救うため共に歩もうぞ》

《我の名は》

《時斗》

《時の守護者なり》

~~~~~

「テメエ動きやがったなアア!!」

ドオオオオ……

「「なっ!」」

テロリストと宗介が同時に驚く。シユユユウ…

突然、白銀のロボットが現れサベージが放った弾丸を消滅させた。

大きさは、アーバレストよりも一回り大きくて、肩・腕・額・脚に不思議な紋様があり、胸には黒い球体がある。

「時斗コックピット内」

「ええ!？な、なにこれ？なんで僕ロボットに乗ってんの？」

困惑する零斗。

（もしかしてさっきの夢じゃないのか？撃たれたはずの人達が、生きてるし…）

——我の名は時斗——

零斗は今の状況を考えた。

「時の守護者だっけ？……あの声の主、時斗が時間を操ったって事かな？…」

ありえないと思ったが、時間が巻き戻ったのは事実だ。

「なんなんだコイツは!？」

我に還ったテロリストが時斗に向かって機関砲を乱射する。

「えっえっ!どうしよう!」

「左に避ける!」

動揺している零斗に宗介が叫ぶ。

とっさに零斗は時斗を左に動かす。

（あれ？操縦の仕方がわかる。）

宗介は機関砲を撃ってきたサベージに単分子カッターを投げ付ける。  
「ぐわああああ！」

サベージが火柱をあげて倒れた。  
すると最後のテロリストが逃走した。

「くそっ！五機もいてやられるなんて！」

（コイツを逃がしたらまた犠牲者が！）

零斗は、時斗の背中にある剣を手にサベージに突進する。

「うおおおおお！！！」

「く、くそおおお！」ドォーーーン

最後のサベージが真っ二つにされ爆発した。

「……ふう……終わった」ようやく戦いが終わり、息をつく。

「そのASに乗っているパイロット出てくるんだ」宗介が呼びかけ  
てきた。

（どうする僕……出ていてもいいけど、なんかマズイ気がする、よくわかんないけど、とってもマズイ気がする……）

「……逃げよう！」

さっと振り返り時斗を走らせる。

「な！？待て！」

宗介が追い掛けてきた。

「逃げ切って見せる！」

速度を上げ、さらに逃げる零斗。

「アル、あのASを捕捉しろ。」

《了解》

零斗はふと思う。

「逃げ切ったとしても、こんなバカでかいのどうすればいいんだ？」

ん〜と逃げながら考える。

「なにか、なにか武器は！」

決して武器を使うわけではないが、一度言ってみたかったのだ。

【※意味がわからない人はファーストガンダムを見よう】

突如零斗の頭に直接情報が流れてきた。

「・・・これだ！」零斗は、時斗のあるシステムを発動させる。すると零斗は外に瞬間移動し、時斗はいつの間にか指輪のようになっている『宝物の石』の中に消えていった。

「消えた…だと？」

《レーダーカラモ反応が消エマシタ》

「馬鹿な…」

「どうにか凌げた〜」

その場を離れ、とりあえず街の人達の救助にあたる。

「もう一度周辺をサーチするんだ」

《了解》

宗介とアルは、零斗の存在に気がつかなかったようだ。

## 第六話：～宗介の上官登場？～（前書き）

突然ですが！この作品に参加させるロボットアニメの希望をとりた  
いと思います！

どうかリクエストを、感想の所にお願ひします♪

○（≡△≡）○

## 第六話…宗介の上官登場？

「襲撃場所から少し離れた街中」  
怪我を負った人達の救助に向かう零斗。

「しかし、なんなんだろうなこの石。」

右手の人差し指にはまっている『宝物の石』の指輪を見ながら考える。

（時間が戻ったのか確かだろうし、まあ自信は無いけどね）

「やっぱり神木様が関係してるよね…大体あそこで拾ったんだから関係無いわけない！…でも、もう村ごと水の底だから調べようが無いしな…はあ…まっいいか！」 零斗は深く考えるのをやめたようだ。

（でも僕あのロボットを操縦したんだよね…憧れのロボットに…）  
自然に笑みがこぼれる。一見危ない人である。

ぶつぶつ言ったり、にやけている間に救助場所に到着。

そこには陣代高校の生徒が大勢救助にあたっていた。  
その中に千鳥の姿が。

「千鳥さーん！」

「ん？ ああ、坂井君！ どうしたの？」

「僕もなにか手伝う事無いかと思って。」

「そうなの、じゃあ他の人達と一緒に細かいコンクリとかを片付けてくれるかな？ 被害はそう広くないけど壊されたビルの残骸が多い。」

「了解しました！ ……あの宗介はどうしたんですか？」



零斗はさりげなく聞いてみる。

千鳥なら宗介が、あのASに乗っていた事について知っていると思っただからだ。

「え!?! 宗介? あゝ……どこ行ったのかしらねゝあいつゝあはははは。」

明らかになにかを隠している。

「……千鳥さん、なにか隠してませんか?」

「ギクッ! そ、そんな事ないわよゝほ、ほらほらまだ怪我してる人いるんだからさっさと作業に入る!」

結局ごまかされた。

「やっぱりあのASに乗っていたのは宗介だったか………羨ましいなゝ」

などと言いながら作業に移る。

ゝゝ???ゝゝ

「正体不明のASですか」

「はっ! 突如現れ、テロリスト掃討の為共闘し、戦闘終了後投降するように呼びかけた所逃走しました!」

宗介が今回の戦闘の報告をしている相手は宗介の所属している組織『ミスリル』の上官のテレサ・テストロッサ大佐である。愛称はテッサでミスリルの所有する強襲揚陸陸潜水艦<トゥアハー・デ・ダナン>の艦長でもある。

しかしその容姿は、どう見ても十代半ばの少女。大きな灰色の瞳、アッシュ・ブロンドの髪を三つ編みにして、左肩から垂らしている。とても軍艦の艦長には見えない。

「そしてその機体は逃走中に消えた……と?」

「はっ！アルに何度か周辺をサーチさせましたが、見つける事は出来ませんでした！」

「そうですか：わかりました。こちらでも調査しておきます、とりあえず相良さんは東京に戻り、カナメさんの護衛を続けてください。」

「了解です！」宗介は、敬礼してその場を後にした。  
するとテッサが

「相良さん：頑張ってくださいね！」  
その年頃らしい笑顔でそう言った。

「はっ！」

宗介はいつも通り無表情で答えた。

「さて：」

（相良さんの持ってきたデータを見る限り、この機体：ASにしては形状が少し大きいし、AS独自の特徴があまり見られない：ASではない人型兵器ということ？）

テッサは三編みにした髪を、口元に持ってきた。これは彼女が考え込む時の癖である。

（後テロリストの使っていたASの出所も掴まきや、日本でいきなり襲撃テロなんて不自然すぎる：やはり狙いは千鳥さんかしら：）

## 第七話…ドタバタ初登校

くくマンションくく

救助活動を終え、自宅に帰った零斗は、また時斗について考えていた。

（時斗は、力無き人の力になるって言ってたけど、具体的に何をすればいいんだろ？）

やっぱり悪を倒す事だと思っただけどさく、今日みたいな事は今の日本じゃ、本来ならありえない事だし…まっ、平和ならそれでいいかな…）

「さっ、今日は疲れたし今後の事は、明日から考えよう」

また深く考えるのを、やめ就寝する零斗だった。くく光の中くく

「スウ…スウ…」

《起きろ零斗》

「グウ…」

《起きろ零斗》

「……………」

《起きるのだ!! 零斗!!》

「は、はい! ってまたここ?」

《…………じきに異なる世界から、悪しき者がやってくる》

《おそらく、それを防ぐ事は無理だろう》

《だから零斗よ、悪しき者からこの世界を守り、悪しき者を呼び寄せている元凶を断つのだ》

「え！？僕達だけで！？」

《いや…悪しき者達と同じ世界から、我等を味方する者達が来るだろう》

《その者達と力を合わせこの世界を救うぞ》

「味方？」

《ある者は、神を越え悪魔を滅ぼす魔神に乗る者》

《ある者は、天使の羽を持つ機械人形に乗る者》

《私が言えるのはその者達だけだ、後はお前の目で力で味方を…》

それだけ言って、時斗の声は途切れた。

零斗も、元の世界に戻された。

くくマンションくく

「ちよっ…もつと具体的に！」

ガバッ

叫ぶと同時にベッドから飛び起きる零斗。

「はくく…何なんだよ一体…」

と、ぼやくが時計を見て凍りつく。

「今何時？……って、ああ！8時20分！？転校初日は、早く来  
いって言われてたのに！」

零斗は急いで支度をした。

「そうだ！時斗に時間を戻してもらえば！」

指輪に向かってそう念じるが、なにも起きない。「ええ！なんで？  
……もういいや！急ご！」

再び支度をして、自転車に飛び乗り、学校を目指す。

「うおおおお！燃えろ俺の魂ィ！」  
などと叫びながら。

〳〵陣代高校〳〵

「ねえねえカナちゃん！今日転校して来る人ってどんな人？」  
金髪のツインテールの少女が、千鳥に尋ねる。

「恭子〳だから転校生に変な期待するのやめなよ〳前例があるでし  
よ」

千鳥が宗介の方を見て言う。

「どうした千鳥？俺に何か用か？」

「なんでもないわよ、なんでも」

ため息をつきながら答える千鳥。

「で、カナちゃん達はもうその人にあっただんでしょ？」

「昨日の住民救助の時もいたわよ」

「だったらなんで言ってくれないの〳！一日早く転校生を見るチャ  
ンスだったのに……」

「はいはい……ゴメンさいね恭子さん」

「じゃあ今日の帰り買い物付き合ってくれる？」

「えー：ま、しょうがないか、いいわよ！」

「やった！ありがとカナちゃん！」

「どう致しまして♪」

キンコンカーンコン

「あ、チャイム鳴っちゃった！また後でねカナちゃん！」

何気ない会話を終え自分の席に戻った恭子、そして宗介は、きびしい顔付きで何かを考えているようだ。

（転校生：坂井零斗か：千鳥に坂井が救助場所に来た時刻を聞いたが、例のASが消えた時間とそう離れていない：あの場所から歩いていけば、それぐらいの時間になるだろうな、確信はないが、坂井がああASのパイロットである可能性もあるな…）

「オーイ、宗介？早く席につかないと先生来るわよ」

「む、すまない」

千鳥が声をかけようやく席に戻る。ガラララッ

「はーい！皆席についてー！HR始めるわよー！」

二年四組の担任の神楽坂教諭が教室に入ってきた。

それと同時に騒がしかった教室が静かになった。

「はい、じゃあまず、昨日はお疲れ様でした。皆怖かったでしょうけど、よく頑張りました。もうあんな事は起こらないかもしれないかもしれませんが、皆助け合いの心を忘れずに！それと・・・（省略）・・・」

「・・・それじゃ、皆お待ちかねの転校生君を紹介しまーす！坂井君入って来てー」

ガラララッ

「ぜえぜえ：は、初めまして：さ、坂井 零斗です：ふう：よろしくお願いしまーす：」

「：と、というわけで転校生の坂井君です。ちょっとお疲れの様なけど1番後ろの席に座ってくれるかな」「は、はい：」

(はぁ：間に合ったはいいけど失敗したな：：)

零斗は、恭子の後ろの席についた。

「それではHRを終わります、今日も頑張りましたよね」

～～HR終了後～～

「ねえねえ！坂井君って何でこっちの学校に来たの？」

恭子は、零斗に質問してきた。

「いきなり前の学校が廃校になっちゃって：で良い機会だから一人暮らしする為に、少し離れた陣代高校に来たんだよ」

「へ～一人暮らしなんだ～カナちゃんや相良君と一緒にだね！」

「え？あの二人も一人暮らしなんだ」

「そうだよ！」

零斗と恭子が話していると：

「坂井君おはよ！」

千鳥と宗介が来た。

「おはよう千鳥さん、宗介」

「ああ、おはよう」

相変わらず：いや前よりも宗介は、零斗を警戒しているようだ。

(皆は、宗介がASに乗っているの知ってるのかな：)

「ねえ宗介って昨日は何処にいたの？」

零斗は聞いてみた。

「昨日はバイトだった為、救助活動に参加できなかった」

「そういえば相良君ってなんのバイトしてるの？」

恭子が話しに入ってくる。

「機密事項だ」

「あ！僕も知りたい」

「機密事項だ」

「え～～」

「ま、まあいいじゃない、宗介も喋りたくないみたいだし」

千鳥が割って入る。

「千鳥さんは知ってるの？」

「え、アタシ？し、知らないわよ、もちろん」

（そういえば、千鳥さんは、知ってるんだよね…どれも確信はないんだけどね）

「あ！坂井君指輪つけてる！」

突然恭子が言う。

「あらホント、坂井くくん、学校で指輪はマズイわよ」

「…んゝそのですね…この指輪外れなくて…」

苦笑いしながら言った。

「外れない？ウソくちよつと見せて」

千鳥は、零斗の人差し指（右手）についている指輪を外そうとした。

「うゝん…宗介引っ張ってみて、…指ごと取っちゃ駄目よ」

「わかった」

今度は宗介が

「ふん！」

力任せに引っ張る。

「ちょ！痛っ！痛いって！」

「くっ、一体どうなっている…切断するか？」

「せ、切断！？」

ゴスッ

拳固一発が入る。

「物騒な事言わない！転校早々トラウマ植え付けるつもり！？」

「…すまない」

「カナちゃん、なにもそこまでしなくても…相良君だって冗談でしょ？」

「俺は冗談は言わないぞ」

「「はあ…」」



三人同時にため息をつく。

「ま、とりあえず坂井君はそれなんとかしてみて、どうしても無理だったら先生にも言っとくから」

「あ、うんありがと」（って言ってもなあ）

零斗は、心の中で苦笑した。

そして今日は、何事もなく一日が終わった。

## 第八話…開かれる異次元の扉

〓〓街中〓〓

「ゴメンね、相良君と坂井君、荷物持ちやらせちゃって」

千鳥が悪びれた様子もなく笑って言う。

「いや、別にいいんですけどね…でも学校帰りの買い物にしては、量が多くないですか!？」

「今週は、色々必要でね」

「そですか…宗介も重くない？僕の倍以上あるよね」

「登山時の荷物に比べれば、この程度他愛もない」

「ふん」

千鳥と恭子が、放課後買い物に行く事になり、零斗と宗介は荷物に抜擢されたのだ。

「あっ！新作のプラモ！アル○アイ○ン・リ○ゼ100／1スケールだ！いいな」

ホビーショップのショーケースに引っ付く零斗、端からみたら少し危ない人にも見える。

「ホントにそういうの好きみたいね、でも小学生みたいに引っ付く

のは、やめたら？周りの人の視線が痛いわよ♪」

「あ、ゴメン！」

「……………坂井、指輪が微かに光っているぞ」

「え？」

零斗は、宗介に言われ指輪を見る。  
確かに光っているようだ。

「へー不思議な指輪だねー」

恭子が呑気に言う。

《来るぞ》

「え？なにが？」

一瞬時斗の声が聞こえた。

そして空が突然光だした。

キーーーーーーン

耳鳴りのような音がして目の前に何かが、二つ現れた。  
ドンッ！！

「な、なにこれ？」

「AS？いや全然違う…」皆混乱しているようだ。

（もしかして、これが時斗の言っていた…）

一体は、ガイコツのような外見で、頭に鎌みたいのが付いている。  
もう一体は、頭が二つあり蛇のような顔をしている。

二体とも昔のロボットアニメに出てくる悪のロボットみたいだ。

「皆！逃げよう！」

零斗が叫ぶ。

「う、うん」

全員その場から逃げ出した。

「わー！逃げろー！」

「か、怪獣だ！」

「助けてー！」

周りの人達も逃げ出している。

「一体ここは何処なんだ？私達は光子力研究所を攻めていたはずだが……まあいい、まずはこの街を火の海にしてやろう、いけカラダK7、ダブラスM2！」

何物かが、ビルの上からあのロボット達に命令を出した。何故か男女の声が重なっている。

そこへ

「ちよつとまったー！」零斗は叫ぶ！しかし時斗には外部スピーカーが付いてないので、外には聞こえない。

「やいやい！悪党ども！この世の平和は俺が守る！文句があるならかかってこい！」

（キマッターー！）

授業中にいくつか考えた決めゼリフの一つを言い、満足したらしい。

「つと、そんな事言ってる場合じゃないよね…」

《零斗、まずはあいつらごと戦いの場を移動する》

「時斗！？ここ通常空間だよ」

《なにも、あの空間でしかお前に語りかけれないわけではない》

「そうなんだ」

《いくつか制限はあるがな、とにかく移動する》  
キューーーーン

辺り一帯が光に包まれ、光が消えた時には、あの二体のロボットと時斗は消えていた。

「なにが起きたんだ？」 宗介は呟く。

そして千鳥と恭子から離れデ・ダナンに連絡を入れた。

「……………クルツか？俺だ、至急大佐殿につないでくれ。なに？なんの事だ？私用ではない……………大佐殿、先日お渡ししたデータあの機体を捜索できますか？……………ええ、再び現れました。それと不可思議なロボットも突然出現しました……………ありがとうございます………います、では、そのポイントに向かいます。それと万が一を考えアーバレストの用意をお願いしたいのですが……………了解です」

宗介は通信を終え、時斗が移動した場所へ向かった。

「坂井がいらない、やはりあいつがパイロットなのか？」

**第九話・・神を越え悪魔を滅ぼす魔神（前編）（前書き）**

前のを前編にして、今回は中編にすれば良かったです…

## 第九話…く神を越え悪魔を滅ぼす魔神（前編）

く海岸く

「ここは？」

《近くの海岸だ、ここが1番人がいなくて戦いやすい場所だ》

「なら良かった」

《…大分落ち着いてきたな》

「そうかな？」

心なしか時斗が笑ったような気がした。

「ふふ…それじゃ行こうか！」

「ええい！なにがどうなっている！何だあのロボットは！？何故いきなり海に移動しているのだ！？」

男と女の声が同時に叫んでいる。

「くそ！行けガラダK7！ダブラスM2！あのロボットを血祭りにあげるのだ！」

『キシャー――』

「くらえ！」

背中の剣でガラダK7を切り付ける。  
ガッ！

「え！？」

『キシャー！』

しかし、剣はガラダK7の装甲を切り裂く事はできなかった。

《零斗、その敵は前の敵よりも頑丈らしい、もっと強い気持ちで切るのだ。お前の心の強さは、そのまま我の力になる》

「うん！わかった！」

零斗は一度距離をとる。そして

「うおおおお！！」

ザシュ！ドサ！

今度は、ガラダK7の腕を切り落とす事ができた。

「よし！！」

《油断するな！》

『グオオオオオオオ！』ダブラスM2が時斗の後ろに周り両腕を封じた。

「フハハハハ！油断したな！ガラダK7とどめをさせ！  
おとこおんな  
男女が命じた。」

「ヤバッ！」

『キシャー！』

ガラダK7が、残った腕で頭の鎌を持ち、時斗目掛け突進する。  
(マズイ！)

~~~~~

光子力研究所

「弓教授！なにが起こったんですか！？」

赤いパイロットスーツを着た、くせっ毛が目立つ青年が言った。

「甲兒君か、うむ突然、機械獣達とあしゅら男爵が消えたのだったな、……正直言って私にもわからない。レーダーからも消えている事から、考えれるのは瞬間移動ぐらいだな……」

「そんな事ができるんですか？」

「理論的には可能なのだが、まだ人の手では実現不可能だろう、あのDrヘルでもそれは同じだと思うのだが……」

「なら一体なにが起きたんでしょうか……」

「うゝむ……」

「まあ、いいじゃねえか！とにかくあいつらは、いなくなったんだろ？なあ、ヌケ、ムチャ」

「ですよねボス……」

「そうだよ！」

がたいの良い、ずんぐり体型の青年が子分の二人に言う。

「そうでもないぜ？突然消えたという事は、突然現れる可能性だってある」

「そうよボス！鉄也さんの言う通り」

「そ、そうだよな、さやか！オイお前ら、さやかの言う通りだぞ！」

「そんな」

「ボスが言ったんじゃないか」

「う、うるさい」

顔を真っ赤にして怒るボス。

「そこら辺にしとけよ、三人とも」

甲児が軽く笑いながら言った。

「それじゃ俺は、マジンカイザーの所行ってくる、いつあしゅら男爵が来てもいいようにな」

「俺もグレートの整備をするか」

「なんだよ二人共…よしヌケ、ムチャ！俺達も行くぜ！」

「「アイアイサー！」」

「ああ！待ってよ甲児君！」

「光子力研究所（格納庫）」

「あら皆、弓教授はなんて？」

「ジュンか、弓教授もよくわからないらしい、それと悪いな、代わりにグレートの整備をやらせてしまっ」

「フフ、いいのよ。ビューナスAの整備も終わってたしね」

「しかし…グレートはこのままでいいのか…」

「どういう事？」

「最近の機械獣は、前よりも強くなっている…今のままではいずれ…」

「気にしすぎよ、グレートは偉大なる勇者でしょ？それに乗っているあなたもね」

「……そうだな」

《……達よ……》

「さやかさん、なにか言った？」

「いいえ、なにも言っていないわよ」

「おかしいな……」首を傾げる甲児。

《……魔神を駆る者達よ……我に力を……》

「え？」

「なに？」

「誰だ！？」

格納庫にいる七人と、司令室にいた弓教授・もりもり博士・せわし博士・のっそり博士が、同時に声の主を探す。

次の瞬間……

キーーーーー

「「「うわーーーーー！！」「」」」

皆、光にのまれていた。

第十話…く神を越え悪魔を滅ぼす魔神（後編）く

く海岸く

「やれ！ガラダK7よ！」

「ヤバイよ時斗！」

《……安心しろ》

「え？」

キーーーーー

「うわアアアアア！」また空が光り、黒い大きなロボットが落ちてきた。

ドスンッ！

「イテテ…ん？なんで俺カイザーに乗ってるんだ？てーか…ここどこだ？」

「なに！マジンカイザーだど！？兜甲児！貴様どうしてここに…」

「お！あしゅら男爵！こんな所にいやがったか！」「ええい！ガラダK7！先にマジンカイザーを倒すのだ！」

『キシャーーーーー』

ガラダK7は向きを変え、今度はマジンカイザーに突進する。

「へっ！カイザーをナメるなよ！タアアアボスマツシャアアパアアアンチ！！」

マシンカイザーの両腕が、ガラダK7に高速回転しながら向かっていく。

『グギャー――』

たった一撃でガラダK7は粉々に吹き飛んだ。

「す、凄い…」

「くっ！おのれ…ダブルスM2よ！せめてその白いロボットだけは倒すのだ」

『グオオオオオオオ』

《自爆する気らしいな》

「……人事みたいに…」

《仕方がないな》

「なにがさ…」

二人（？）が半ば諦めたその時

「サンダーブレイク！！」雷撃がダブルスM2を襲う。

『ギャオー――』

「今だ！」

零斗はブースターでダブルスM2から離れた。

ドスッ！

ダブルスM2は真っ黒になりその場に倒れた。

「フッ、そこお前大丈夫か？兜も無事のようだな」
そこにはグレートマシンガーに乗った剣 鉄也がいた。

「鉄也さん！」

「くうう！覚えておれ！マシンカイザー！グレートマシンガー！白いロボット！」

あしゅら男爵が去っていく。

（……地獄城の反応はあるが……Drヘルにお聞きするしかないな……）

「ありがとうございます！……って聞こえないか、時斗、あの人は誰が味方？」

《そうだ》

「じゃあ、今の状況を説明して、後の事を考えよう」
零斗は、時斗を指輪に戻し外に出る。

「あのー！ちょっと降りてきてくれませんかー！今の状況を話したいのでー！」零斗は、できる限り大きな声で言う。

「兜、知り合いか？」

「いいや、まあ悪い奴には見えないし行ってみようぜ」

「そうだな」

二人がマシンガーから降りてくる。

「初めまして、坂井 零斗っています。よろしくお願いします」
零斗は握手を求めた。

「剣 鉄也だ、こっちは仲間の兜 甲児、他にも仲間がいるが、向こうで待機している」

「よろしくな零斗！」

「こちらこそ剣さん、それと甲児さん」

「おいおい、俺には、さんはいらないぜ。気軽に甲児って呼んでくれ」

「わかった、よろしく甲児」
零斗と甲児も握手をする。

「で、率直に聞くが…なにが起きてるんだ？」
鉄也が聞く。

「ん…実は、僕もよくわからないんです。わかっているのは、この世界が貴方達の世界とは違うという事ぐらいです」

「？なんだと？なら何故あしゅら男爵がいるんだ」
「あしゅら男爵？」

「ああ、さっきの機械獣を操っている縦半分半分男と女一緒になっている奴さ」

「戦闘中に聞こえたあの声の主か…」

「そいつの上には悪の親玉Dr，ヘルがいるんだ」「へ」

「それじゃ続きを頼む」

「うん、え」と……」

零斗は、時斗から聞いた話しをできる限り話した。

「なるほど……ならその元凶を倒せば、俺達は元の世界に戻れるのか？」

「多分戻れると思うけど……、今度時斗に聞いてみるよ」

「まっ、まずは、あしゅら男爵とDr，ヘルを倒さないと」

「よし、他の連中と合流する。ついて来てくれ、もちろん坂井もな」
零斗は、鉄也の案内で他の仲間と合流する事になった。
しかしそこに……

「待て！」

銃を構えた宗介がやってきた。

第十一話…軍曹来襲？…

（海岸）

「宗介！？」

零斗が叫ぶ。

「なんだなんだ？友達か零斗？
と甲児。」

「う、うん。って宗介なんでここに？
というか、手に持っているの
降ろして！まずは」

「やはり、お前がああASのパイロットだったのか」

「AS？時斗の事か…時斗はASじゃないよ」

「なんだと？ならあの一機は？」

銃口を、零斗に向けたまま聞く。

「おいおい、友達にしては乱暴な奴だな。あれは俺達の魂マシン
だ」甲児が代わりに答える。

「……………零斗聞きたい事がある。お前達は、なんの目的がある」

「目的？……………しいて言うなら世界の平和を守るため…かな？」
自分で、言ってて少し恥ずかしくなった。

「坂井、恥じる事はない。俺達がやっているのは、まさにそれなん
だからな」
鉄也が言う。

「……………お前達に悪意がないのはわかった…だが、いつ脅威になるかわからん物を、放って置く気にはならん！お前達を拘束する」

「ふん、やれるものならやってみろ。一つ言っておく、俺は戦闘のプロだ。たかが銃を持った学生などには負けん！」

「只の学生だと思ふのだったら、それはお前の誤算だ！」

「ちょ、ちよっと待って！」

戦闘を始めようとする二人の間に、割って入る零斗。

「邪魔をするな！」

「そ、宗介は日曜日に現れたASのパイロットなんだろ？」

「……………そうだ」

「だったら僕の話しを聞いて、今僕は仲間を探してるんだ」

「…仕方がない……いいだろう」
銃を降ろす宗介。

「…ありがとう」

零斗は、さっき甲児達に話した事を宗介に話した。

「……………出まかせも程々にするんだな」
スチャ

また銃口を零斗に向ける。

「いやホントなんだって！」
「そんなマンガのような事があるわけがない！」

「宗介も見たら？あの変なロボット、どう見てもこの世界のロボットじゃないでしょ！」

「……………」

宗介は黙ったまま、なにか考えてるように見えた。

そこへ

ビービービービー

宗介の通信機に通信が入る。

「……………」

「取らなくていいの？」

カチャ

宗介は銃口を零斗に向けたまま通信機を取る。

「…ハイ、大佐殿！？……………本当によろしいのですか？……………了解しました」

「オイ零斗、俺達三人掛かりでやれば逃げ出せるだろ」

甲児が小声で話しかけてくる。

「でも僕、宗介と同じクラスだから今逃げても…」

「お前達！今から俺とある場所に来てもらう。反論なら聞かないぞ、どのみち、もうすぐ警察がやってくるだろう。その巨大なロボットを隠せればできまい」

「……………わかった、二人共行こう」

「オ、オイちょっと待てよ、いきなり銃を向けてくる奴の言いなりになるってのかよ！」

「俺も賛成は出来ない。いざとなればマジンガーに乗って逃げればいい」反対する二人。

「でも、いつまでも逃げてる訳にも行かないよ。ここは一つ賭けてみよう」

「お前って見掛けによらず度胸あるなく、よしいいぜ、その賭けに乗ってやる」

「フッしょうがない：俺も乗るぜ」

「ありがとう二人共」

「どっちみちお前達に拒否権はない。ついて来い」
宗介が無表情のまま言う。

「こっんのくく…一発ぶっ飛ばしてやろうか」
甲児が拳を握る。

「まあまあ」
なだめる零斗。

「そこの二人は自分の機体についてこい。坂井、お前の機体は何処だ」

「ん？ ああ、ちゃんと乗ってついてくから」

「そうか：アルECS解除！」

突然、この前の白いASが現れた。

「うわ！ なにこれ！」

「ECSだ」

「光学迷彩みたいなもの？」

「そんな所だ」

宗介はアーバレストに乗り込む。

甲児と鉄也もマジンガーに乗る。

「よし、時斗！」

時斗が現れ、零斗はコックピットへ瞬間移動した。

正確には時斗が現た瞬間に、自動的にコックピットに移される。

「……………手品か？」

宗介は呟きアーバレストを動かす。

零斗達は、それについて行く。

く崖く

「此処から海に飛び込むんだ」

「は？正気かお前、なんで海に飛び込むんだ？」

「黙って俺の指示通りにしろ」

「なんだとこのヤロ」甲児は、また拳を握りしめる。

（それにしても宗介の奴、随分と感じ違うな、学校の時……………
…そこまで変わらないか…）

「行くぞ」

崖から海へ飛ぶ宗介
アーバレスト

「ええい！どうにでもなれ」

甲児も叫びながら飛ぶ。

「じゃあ剣さん行きましようか」

「ああ」

続いて二人も飛ぶ。

ドーーーーー

次々に落ちていくロボット達。そこに：

「ダナン、あの人達を回収して」

《アイ・ママ》

第十二話・・着艦（前書き）

あゝゝゝ…

もつと明るい作品にしたいですゝ…

ちなみに登場作品は着々と決定しています！！

第十二話…着艦

「デ・ダナン」

トウアハー・デ・ダナンに回収された零斗達は、すぐに艦長室に呼ばれた。【※崖下に潜水艦が来れる訳ないと思う方！気にしないでください！】

ちなみに時斗を指輪に戻した時、格納庫にいた人達はかなり驚いていた。甲児と鉄也も改めて驚いていたようだ。

「司令室」

「まず、初めまして、この艦の艦長のテレサ・テストロッサです。こちらは、副長のマデューカスさん」

「……」

マデューカスは何も言わず、険しい目つきで零斗達を見ている。

「は、初めまして坂井零斗です…」

「か、兜甲児です」

「剣鉄也だ」

零斗と甲児は、かなり緊急しているが、鉄也は相変わらず落ち着いている。

「それでは、いくつか質問も」

「待て、一つ聞きたい事がある」

鉄也がテッサの話しを遮る。

「为什么呢？」

冷静に対応するテッサ、しかし横の二人は、かなり慌てている。

（鉄也さん…なにを…）

「あんたは本当にこの艦の艦長なのか？」

「……………私がとても艦長には見えないと？」

「ああ、その通りだ」

「貴様！大佐殿になんて事を！」
後ろで待機していた宗介が叫ぶ。

「いえ、相良さんいいです」

「……………」

相手の目を見る二人（鉄也とテッサ）

「成る程、それなりに修羅場はくぐってるみたいだな。すまなかった、続けてくれ」

鉄也が言う。

「ありがとうございます。では、いくつか質問を」
零斗と甲児は、ホッと胸を撫で下ろす。

「貴方達は誰ですか？」

「「「は？」」」

三人が同時に言った。

「あ、坂井さんはいいです。既に報告は受けていますから」

「実は、この艦に入った時に少しデータを取らせて貰いました。し

かし貴方達二人はこの世界の誰ともでないんです」
つまり、この世界に存在しない人物ということだ。

「確かに、存在しない事になっている裏の人間もたくさんいますけど、でも貴方達はそんな人には見えません。だから素性だけでも聞いておこうと」

「そういう事か、ならその、零斗に聞けばいい。唯一俺達の状況を知っている“こっちの世界”の住人だ」
鉄也が零斗に話を振る。

「どういうこと…ですか？坂井さん」

「え？あ、じゃあ、僕が知っている事を話しますね！……まあ、信じられないと思いますけど」

零斗は、今までの事を全てテッサに話す。
が

（正直同じ話を三回もすると、ちょっとな…）
少し疲れてきたらしい。

「……………そんな事が…」

「艦長！そんなでたらめな話を信じるのですか」
マデューカスが始めて口を開いた。

「……確かに、ありえないとは思いますが。でもこの坂井さんが、嘘をついているようには見えません」

「しかし、さっき送られてきたデータによると、あの黒い機体には凄まじいエネルギーが詰まっているようです。特に胸にZのマークがある方は、一機でこの艦を沈めるぐらいの力があるそうです。そ

んな機体を一民間人に持たせる訳には…」

「おいおい、艦長さん！勝手にカイザーをいじらないでくれよ！」
甲児が言った、緊張からは抜け出したようだ。

「本当にすみません、兜さん。……一つ…提案があるんですが…」

「なんででしょうか？」

零斗が言う。

「ミスリルに所属してくれませんか？」

第十二話…着艦…(後書き)

機体説明!!

第一弾…時斗

全長…14, 5 m

重量…16 t

装甲部分は白銀で、間接部分は黒でできている。本文中でも書いたが、額・肩・腕・脚に紋様があり胸には黒い球体がある、黒い球体はコックピットだが乗り込み口はない。

零斗が、時斗を出した時に自動的にコックピットに行くようになっている。

他には、時斗が外にいる状態で零斗が黒い球体に触れるとコックピットに入れる。

武装は、背中のバックパックの左側に（デスティニーガンダムのように）ある剣、この剣は日本刀のような形しているが、大きさはかなりある。

後は、腰についている中型の銃で弾丸はなく、ビームガンになっている。

他にも隠された武器や能力が幾つかある。

→考えてないわけじゃないですよ？

まあ、こんな感じですよ！正直どう文章で表現したらいいかわかりません！

時斗についてはまた解説すると思います！

第十三話・・和解・協力（前書き）

早く人間にな……じゃなくて早く他の作品を入れたいです……（最初のコメント意味わかんない人すみません）

でも、自分の未熟さが文章に段々表れてきました……

うわあああああああ！！↑（壊れた）

第十三話…和解・協力…

（デ・ダナン（司令室））

「え？」

思わず、ぬけた声が出た零斗。

テッサは、構わず続けた。

「皆さんにミスリルに入って頂きたいのです」

「でもよ艦長さん。今日いきなり会った俺達を信じられるのか？」

「俺は、軍の一員にはなりたくはない。ミスリルも軍の一関なのだろう？」甲児と鉄也は自分の疑問と不満を言った。

「……私はまだ小さく、自分を守る力ありません。ですが、相手が信じられる人かどうかは分かりますよ？それとミスリルに入って頂きたいと言いましたが、協力するという形ではどうでしょうか？あの機体をこの艦に匿う事もできますし…貴方達の敵との戦いも全力で協力します」

「「「……………」」」

「これから私達は、強大な力を持った組織と戦う事になると思います…その組織と同等に戦う為に貴方達の力を貸して欲しいんです！」力のこもった言葉で零斗達に言う。
これほど真つすぐな目で言われたら逃れる術はないだろう。

「わかったぜ艦長さん、俺は、あんた達に協力する！鉄也さんはどうすんだ？」

「俺も協力しよう。どのみちマジンガーをどこかに隠さなければならぬ」

「僕もいいよ！僕と時斗は悪を倒す為にいるんだから！」
と零斗も言ったが、周りが不思議な目をしている。

「な、なに？」

その視線の先が自分だと気づき口を開く。

「ふふ、若いすな」

マデューカスが言った。

（（あ、笑った…））

零斗、甲児、鉄也が同時に思う。

「だが俺は嫌いじゃないぜ」

「俺もだ」

「そうですね♪」

零斗と宗介以外全員が笑っている。

「は？え？？」

頭に三つ？を浮かべ困惑する零斗。

現在の状況がまったく解らないようだ。

「いや、お前、自分は悪を倒す為にいるって、中々言えないぜ？」
甲児は説明する。

「え？だってそれが僕達の仕事だって鉄也さんも…」

「確かにそうはいったが：そこまで堂々と胸を張れるとはな、まあ、俺にもそういう時があったけどな」

また皆が笑いだす。零斗の顔は？でいっばいだ。

「その辺にしておこうぜ、コイツ天然だ」
腹を抱えながら甲児は言う。

「ま、まあ本題に戻りましょう。それでは三人共協力してくれるのですね」

「いいぜ！」

「ああ」

「ハイ！」

三人は返事をする。

マデューカスも異議はないようだ。

「相良さんもいいですか？」

「問題ありません：」

少々不満があるような顔をしている。

「では、甲児さん達の敵のデータをもらいたいのですが：」

「それは弓教授を呼んだ方がいいんじゃないか？」

「そうだな、テストロッサ艦長。まだ俺達の仲間がいるんだが：」

「いいですよ。その人達にも事情を話さないといけませんし」

「なら俺がグレートで行ってこよう」

「俺もカイザーで行くぜ！零斗はどうする？」

「あ、僕は待ってるよ」

「そうか、じゃ行こうぜ鉄也さん！」

甲児と鉄也は司令室を出て格納庫へ向かう。

「艦長：あまり部外者を艦内に入れるのは…」

「いいえ、マデューカスさん。彼等は部外者じゃありません。もう私達の仲間です」

「……………」

反論をやめたマデューカス。

その顔は、少し笑っているようにも見える。

第十三話…和解・協力…(後書き)

機体解説第二弾!!

ARX-7アーバレスト

全高…8,5m

重量…9,8t

武装…12,7mmチェーンガン×2

XM18ワイヤーガン×2

ボクサー57mm散弾砲

ロイヤル・オードナンスM1108対戦車ダガー

ジオトロン・エレクトロニクスGRAW-2 単分子カッター等

この中で宗介は特にボクサー57mm散弾砲を愛用する。
格闘戦では単分子カッターを使う。

アーバレストはM9をベースに造られたラムダ・ドライバ試験機で、ミスリルが所有する唯一のラムダ・ドライバ搭載機である。
カラーリングは白を主にしてある。
ラムダ・ドライバ発動時は、壮大な力を発揮するが、今はまだ宗介は使いこなせていない。

（使いこなせていないのは、序盤の方だけです。ちゃんと原作通り
使いこなせる日が来ます）

第十四話…笑い者…

…デ・ダナン／一室…

艦内で待機する事にした零斗はテッサに言われた部屋で休んでいた。部屋の隅では、宗介が壁に寄りながら黙って立っている。今この部屋の空気は、試験中の教室の空気よりも重い。

「……………」

「……………」

「……………」

「あ、あのさ、僕に何か用？」

あまりの空気の重さに耐え切れなかった零斗は口を開いた。

「…大佐殿は、ああ言ったが俺は、まだお前達を信用した訳ではない」

（…はあ…どうしたら信用してくれるんだろ…）

宗介が零斗を監視（？）していると、部屋の扉が開き

「オッス、ムッツリ軍曹！噂の新人社員ってのはどこだ？」

金髪ロングの、いかにも遊び人のような西洋人が入ってきた。

「クルツか、それならそこに座っているのがそうだ」

（ムッツリ軍曹の所は気にしないんだ…）

「なんだよ…女の子じゃねえのか…ん？でも三人のはずじゃないの

か？」

「他の二人は所用で出ている。仲間を連れてくるそうだ。……言っておくが、二人も男だぞ」

「んだよ……」

（あからさまに落ち込んでるな）

「にしても、よくテッサ部外者を大勢連れ込むの許可したな」

「ああ、大佐殿にもなにか考えがあるんだろう。……俺には理解できないがな」

「相変わらず用心深いことで、いいじゃねえか。これでかなり戦力上がるんだろ！整備士の野郎共が話してたけど、半端じゃないらしいぜ、あいつら機体」

「そうよ宗介、ミスリルは、ただでさえ戦力が足りないんだから！今度は黒髪でショートカットの大人っぽい女性が入ってきた。」

「だがなマオ、こいつらが突然寝返ったらどうする？」

「あんたね……私は信じるわよ。テッサが認めた奴らなんだから」

「むう……」

マオの言葉に黙ってしまう宗介。

零斗は……

「あ、ありがとうございます！」
お礼を言った。

「え？」

突然の事に少し驚くマオ。

「あ、いや…僕達の事信じてくれて…」

「っぷ…アハハハハハ！」

笑われた。

またかと思ひながら顔を真っ赤にしながら零斗は言う。

「な、なんですか！僕は本当に有り難いと思って言っただけですよ！」

「…ハハハハハ！ハア…ゴメンゴメン。あんたテッサの言った通りね」

「あーもー！皆して僕を笑ひ者にしてー！そんなに人を笑うのが楽しいかー！！」

「なあなあ、姐さん。テッサは、なんつってたんだ？」
クルツがマオに聞く。

「それがね……」
マオはクルツの耳元で言う。

「くっく！確かに」

また零斗と宗介が取り残されるのだった。

第十四話…笑い者…（後書き）

機体解説第三弾！！

マジンカイザー

マジンカイザーについては、もう一回解説するので今回は武装だけを

光子力ビーム

目から発射、光子力エネルギーを利用したビーム。

冷凍ビーム

耳の辺りにある角のような部分から発射。その名の通り相手を瞬時に凍らせる。

ターボスマッシュパーパンチ

両腕を高速回転させて相手に飛ばす。

カイザーナックル

両腕を高速回転させて飛ばさずに相手を殴る。

ギガントミサイル

腰正面から発射。かなりの弾数が搭載されている。

ルストトルネード

口部分から竜巻を発生させて相手を風化させる。

カイザーブレード

肩部分に収納されている剣。

ファイナルカイザーブレード

胸のZの部分から出す。カイザーブレードよりも大型の剣。

ファイヤーブラスター

胸の赤い部分から、超高温の光線を出す。

超合金Zすらも溶かす。

第十五話…仲間と合流…

…とある森林…

マジンカイザーとグレートマジンガーでデ・ダナンから出た甲児達は弓教授や、さやか達が隠れている森林に向かった。

「兜、あそこだ」

「お、ボロット発見」

甲児が見つけたロボットは、ボスがパイロットのボロットである。

「おーい！鉄也！兜ー！こっちだー！」

この声はボスだ。

ボスの横には、子分のヌケとムチャもいる。

そこへマジンガー達を降ろす甲児達。

「よ、ボス！なんだか懐かしいな」

「は？なに言ってるんだ、まだ一日も経ってねえぞ？」

「いや、色々あったもんでな。それよりさやかさん達は？」

「ああ、向こうにいるぜ。」

「そうか、なら話があるからボスも来てくれ。」

「おうよ！」

改めてさやか達の元へ移動する。

「あ、甲児くん！」

甲児に向かって手を振るさやか、どうやらビューナスAもあるようだ。

「さやかさーん！」手を振り返す甲児。

「鉄也…お帰り」

「ああ…」

ジユンの言葉に素っ気なく返す鉄也。
これは彼の照れ隠しのような物だ。

「甲児君無事だったか」

「弓教授！弓教授も無事で良かったです。」

「で、甲児君なにが起きたか君はわかったかね？」

「あ、ハイ！それも含めて少し来て欲しい所があるんですが…」

「ん、わかった。その前に一つだけ教えてくれないか、ここは何処なんだ？」

「……信じられないかも知れませんが、ここは俺達のいた世界とは違うそうです」

「「「!!!」」」

甲児の話を聞いていたさやか、ジュン、ボスが驚く。

「…本当なの？ 甲児君…」

「本当さ」

「マジかよ兜…」

「鉄也…」

「事実だ」

ジュンの問いには鉄也が答えた。

弓教授は黙っていたが、少し間を空けて口を開く。

「…：…そうか…：わかった」

「ハイ…でもこの世界には、あしゅら男爵が来ています。もしかしたらDr, ヘルも…」

「うむ、とりあえず甲児君の言う所に行こう」

「ハイ！」

「甲児君…」

「兜…」

「そんな不安な顔するなって、頼りに仲間もできたんだぜ！」

なんとか二人の不安を和らげた甲児はカイザーに乗り、他の皆（鉄也はグレートに）はボロットとビューナスAに乗り込み、またデ・

ダナンに向かった。

第十六話…最初の悪…

「……?」

そこは、昼間だと言うのに暗く全体的に不気味な雰囲気を出している島だった。

「Dr, ヘル! Dr, ヘル! どうなっているのですか!? あの光はなんだったのです?」

あしゅら男爵が、走りながら誰かに叫んでいる。

「落ち着けいあしゅら男爵よ!」

あしゅら男爵がたどり着いた広間には一人の老人が立っていた。

その老人は顔中髪と髭に覆われていて、手には長い杖を持っている。この男こそ、悪の発明家Dr, ヘルである。

「はあ!」

Dr, ヘルの前に立ったあしゅら男爵は、その場にひざまついた。

「してDr, ヘル…何が起きたのです?」

「うむ…わしも突然光に包まれて、気付いたら地獄城ごと此处におったのだ」

「なんと…」

「そしてわしは調べたのだが、この日本には光子力研究所が存在し

ておらんかった」

「なんですと！それは本当ですか！？」 「探索機を送ったのだが、光子力研究所は、あった形跡もなかった。それどころか、わしらが侵略しようとしている日本とは技術が、まるで段違いだ」

「どういふことです？」

「うむ、どうやらこの世界はわしらのいた世界とは違った世界のようだ。」

「そんなことが……」

あしゅら男爵も驚きを隠せない。

その後D r，ヘルは自分で調べあげた事をあしゅら男爵に話した。あしゅら男爵もこの世界に来て戦った白銀の機体とマジンカイザーの事を話す。

「マジンカイザーもこちら側に来ておったか……」

「どうなさるおつもりでD r，ヘル」

「ふん、なにも世界が変わったぐらいだ。今まで通りやる事は変わらない！」

「おお！では……」

「あしゅら男爵よ！戦力を整えろ！世界征服の為の準備をするのだ
！！」

「ははあ！！！」

こうして最初の悪、D r，ヘルとの戦いが始まった。

第十六話…最初の悪…(後書き)

機体解説第四弾!!

グレートマジンガー
また武装だけです!

どの武器もマジンカイザーに比べるとかなり落ちる。
アトミックパンチ
両腕を飛ばし、そのまま相手に突貫させる。

ドリルプレスシャーパーンチ
両腕を回転させて相手に突貫させる。

ルストハリケーン
口から竜巻を発生させる。
カイザーのように風化させる力はない。

ネーブルミサイル
腰正面から発射するミサイル。

マジンガーブレード
カイザーブレードに比べ少し小振りの剣。

サンダーブレード
グレートが発生させる稲妻で相手を攻撃する。

グレートブースター
科学要塞研究所から発射させ、その上にグレートが乗り相手にぶつ

ける。

ブレストバーン

胸の赤い部分から発生させる熱光線。

→

まだまだグレートは強くなります！！

第十七話…宗介ようやく和解…（前書き）

は…タイトルが適当になって来ましたね…（泣）
あと更新は週に三…七回が目標です…！！

第十七話…宗介ようやく和解…

「デ・ダナン」

再びデ・ダナンに戻った甲児一行。

それぞれの自己紹介をすませ、弓教授はテッサにDr, ヘルの情報を、テッサはこちらの世界の情報を弓教授に。

他のメンバーは、別室で話しをする事になった。

「………ってのが俺達の世界の歴史だ」

甲児が、自分達の世界の歴史を話していたようだ。

「へー、大体の事は私らの方と変わんないようね」
マオが言う。

「ま、こっちには、その機械獣だかってポケモンはいないがな」
気取ってクルツが言う。

「それを言うならあのASなんて向こうじゃ有り得ないぜ？あんな物が世界中にあるなんてな」

鉄也が言った、それに続けてマオが言う。

「でも一機での性能ならマジンガー…だっけ？ASとは比べ物にならないわね。ま…あのガラクタぐらいなら勝てるけど」

「オイ、いかす姉ちゃん！そりゃボロットの事言ってるのかよ！」
ボスが会話に参加してきた。

「そうだけど？」

素っ気なくマオが返す。

「なにを〜！」

「ボス！少しは落ち着きなさい！それに……事実なんだからしょうがないでしょ？」

さやかが、なだめる（？）

「う……さやかよ……」結構傷付いたようだ。

そんなこんなで場も和み、メンバーは親睦を深めていった。
一人を除いて。

「……………」

さつきから一言も話さない宗介、そこに零斗が話しかける。

「あのさ宗介さん？まあ、信じられないと思うよ？いきなり異世界から来ましたって。でもこれから一緒に戦っていく仲間なんだから仲良くしようよ！」

出来るだけ笑顔で爽やかに言い、握手を求める。

「……………」

無視

「ね！？」

再度握手を求める。

「……………」

無視

「ふ、…ふふふ」

段々笑顔が引き攣ってくる。

「フ、零斗良い手があるわよ」

マオが、零斗に肩をかけ話す。…酒くさい。

そしてマオは携帯を取り出し、誰かにかける。

「…あ、カナメ？久しぶりね、マオお姉さんだよ」

《…マオさん…酔ってます？》

「ぜーんぜん！でさー今隣に宗介と零斗が居んだけどー宗介が零斗と仲良くしないのーなんか言っちゃってよー」

（そんな…相手は幼稚園児じゃないんだか…てゆうか、マオさんいつの間にお酒を…）

零斗は、マオの後ろにある大量のビール缶を見ながら思った。

「ハイ、宗介ーカナメが話したい事があるんだってー」

宗介に携帯を渡し、また酒を飲み始めるマオ。

「千鳥か、俺になにか《宗介ー！ー！》」

「！！？」

思わず携帯を耳から離す宗介、ちなみに隣にいた零斗もダメージを

受けている。

《アンタまだ坂井君避けてんでしよう！？いい加減仲良くしなさい！！》

「し、しかし、奴は…」

《しかもかかしも無い！！まったくアンタは…いい？まず相手の目を見なさい！その目が澄んでいたらその人は良い人！それだけ！》

「……………」

《まだ文句ある？》

「……………問題ない」

《ならよし♪何処にいるか知らないけど早く帰ってきなさいよ？》

「了解した」

宗介は電話を切り、零斗の方に向く。

「……坂井、すまなかった」

それだけ言って、今度は宗介から握手を求めた。

「うん！よろしく！」

二人は握手をしてお互い相手を仲間と認めた。

後ろで倒れている仲間は放って置いて……

第十八話・・学園生活開始！・（前書き）

これから第二章のような物が始まります！

第十八話…学園生活開始！…

…陣代高校…

「ねえねえカナちゃん！またうちのクラスに転校生来るんだって」
恭子が数日前と同じような事を言う。

「また！？てゆうか、なんでうちのクラスに来るの！？坂井君入ったばっかなんだから、他のクラスに行くでしょ普通」
いきなり不満を放つ千鳥。

「なんかねーその生徒が問題児だった時は、相良君に任せられるからだ♪」

「って林水生徒会長が？」

「うん♪」

「……頭痛がしてきた…」

ガラガラッ

「ハイイ！皆静かに。えー今日は、またお友達が増えます！」

（（小学生か！））

クラスの大半が、心の中でツツコミを。

「じゃ、入ってきてー」

教室に入ってきたのは零斗、宗介共に

「失礼しまーすつと！へへ、俺は兜甲児！よろしくな」

少し古い入り方をしてきた転校生は甲児だった。

「あ、兜なに目立ってんだよ」
後ろにはボス。

「どうでもいいから早く入ってよボス」
さらにさやかまで。

一応ヌケ、ムチャもボスの横に。

「じゃ、転校生諸君は空いてる席に座ってね」

ちなみにクラスの反応は・・・

（（（キャラ濃！！）））
であった。

さて、時は遡る事三日前・・・

（デ・ダナン）

ダナンのクルー達との交流を終えた甲児達は、また司令室に

「時間がないので率直に言います。甲児さん達、学業の方はどうします？」

テッサが問う。

「へ？学業？ああ、学校の事か：どうするって聞かれても：さやかさんどうする？」

甲児は、さやかに話を振る。

「うーん：できれば高校に行きたいわね、元の世界に戻った時の為にね」

「そうですか、なら私に良い考えが・・・」

という事で、甲児達は陣代高校に入る事になったのだ。ボスが多少渋っていたが、鉄也とジュン以外全員（甲児・さやか・ボス・ヌケ& amp; ムチャ）は無事入学できた。

（陣代高校（休み時間））

「なんか凄そうな人達だねカナちゃん：」

甲児達の方を見ながら、恭子は千鳥に話しかけている。

「……そうね：問題を起こさないとホンツツツトツに助かるわよね！」

微妙に会話がズレている二人。

甲児達が宗介（零斗も）と話しているのを見て心底不安のようだ。

「ねえ…宗介、千鳥さんにもちゃんと甲児達の事話して置けば？ なんかこつちを睨んでるよ」

少し体が震えている零斗。千鳥の睨みは、対象じゃない零斗にも影響を与えている。

（対象の宗介は、何事も無いように平然としているが）

「そうだな。だが、話しが長くなる…、そうだな…帰りに話す事しよう。」

「それが良いね」

「…：なんで学校なんか来なくちゃいけないんだ？」
ボスが、まだ不満を言っている。

「でもボス、この学校可愛い子多いですよ」
ヌケが言う。

「本当か！？なら授業終わったら遊びに行こうぜー！」
すぐに食いついたボス。

「お！俺も行くぜ！」

甲児も乗ろうとするが・・

「甲児く…ん？」

後ろに、鬼のような顔をしたさやかが居た。

「じよ、冗談だってさやかさん」

直ぐに取り繕う甲児。

こちらにも相変わらずのようだ。

第十八話…学園生活開始! (後書き)

時旅! 突撃アンケート!!!

え〜と第一弾!

Q…この作品に時旅オリジナルヒロインは必要でしょうか!?

A…????

答えは感想・評価の所かメッセージでお願いします!!

…: なんなんでしょうねこのコーナー:

第十九話・・新たなる来訪者（前書き）

短い上に、なんか展開が早くなってしまいました…。

第十九話…新たなる来訪者…

…零斗の部屋…
マシヨン

とりあえず、放課後宗介は零斗の部屋で千鳥に事情を話した。
もちろん甲児達も居る。

「へー、そんな事があるんだー。知らなかったーハッハッハ！……
って言うと思ったかぁー！ー！」
宗介の顔面に千鳥の鉄拳が飛ぶ。
ドゴッ

「……………かなり痛いぞ」

「ま、まあまあ。千鳥さん落ち着いて…甲児達も驚いているし…」
千鳥は、ハッと我を取り戻してその場に座った。

「ゴホッ…で？今の話し本当なの坂井君？」
今度は零斗に聞く。
まだ少し殺気があるようだ。

「う、うんまあ…一応ね…」

「はあ…まっいいわ。転校生が、おバカ軍人でも異世界の人達でも
私には直接関係しないから」

「…そんなもんですか？」

「そんなもんよ」

「かなり度胸座ってるな〜アンタ」
甲児が千鳥に話しかける。

「まあね♪」

(……………馴染むの早ッ!!)

零斗の心の中のツツコミ。そうして今日、零斗達は千鳥を含め色々な話しをし、皆帰路についた。

「ん〜なんかお腹すいたな…コンビニでなにか買ってこよつと」

夜遅く零斗はコンビニに行く事に。

コンビニで肉まんとお茶を買った零斗は、気まぐれで近くの公園へ。

「…こんな所に公園なんか在ったんだ。流石に人はいないか…夜だもんな〜」

結構広い公園内を見渡し、零斗は呟く。

その時……

バシユウウ

空から何かが降りてきた。

「またー！ー！は、早く時斗を…」

時斗を呼ぼうとした瞬間、その降りてきた物から人が出てきた。

「そこのお前、動くな」銃を向けられ話しかけられる。

数日前にも同じような事があったような気がした零斗であった。

第二十話…翼を持つ者…

…公園（夜）…

公園に降りてきた機体は、アーバレストよりも白く、ASよりも人間に近い形状をしているが、背中に天使のような翼がある。

「…綺麗な機体だなあ」零斗は思わずそう呟いたが・・・

「なんて言ってる場合じゃないか…あの、銃を下ろして欲しいなあ…なんて」

「なら、大人しくこちらの質問に答えろ」

暗くてよく姿が見えないが、声はまだ若い青年のようだ。

「前にもそんな事言われたような…」

「此処は何処だ？この世界には、MSは存在するか？これと似た物だ」
モビルスーツ

謎の青年は、翼を持った機体を指差して言った。

「MS？ASならあるけど…あ、此処はジャパンです」

「そうか…ならここも別の世界なのか」

謎の青年はボソツと言う。

「え？もしかして…君って、異世界に行った事があるの？それと軽いボケは無視ですか？」

「なんだと…お前何物だ」

威圧感たっぷりの目で零斗を見る。

「軽くスルーしたね…あー、話すのは構わないけど、先にそっちの事情を聞きたいな」

「……いいだろう、俺の名前はデュオ・マックスウェルだ。俺は数週間前、ある組織との戦いの準備をしていた。だが、敵地に乗り込む直前…いきなり不思議な光に飲み込まれ、別の世界に移動したようだ」

「その別の世界ってどんな所？」

「……鬼がいた」

「は？鬼？」

「世界自体は、そこまで俺が居た世界とは変わらい。だが、その鬼と戦うゲッターロボとか言うロボットがいて、MSが存在しない。変わった所は、それぐらいだ」

「はー鬼にゲッターロボねー。色んな世界があるんだ」

「俺はゲッターロボに接触してないがな。さあ、次はお前だ、早く話せ」

デュオは話し終わり、次は零斗に話すよう急かす。

「はーい」

零斗は、甲児達に話した内容と同じ事を話す。

「その話しからすると俺は、お前の機体に呼ばれたと言う事か？」

「どうだろ？時斗に聞いて見ないと」

「どっちでもいいが、早く俺は、元の世界に戻らなければならない」

「わかったよ。じゃ時斗を……ってもう朝じゃん！！デュオ！その……え」と…」

長く話している内に朝になってしまったようだ。近くにまだ人影は無いが、後1〜2時間もすれば、かなり人が通るようになるだろう。

「ウイングガンダムゼロだ。ゼロと呼ばば良い。」

「じゃあ、ゼロを隠さないと人来るよ！」

「そうだな余計な騒ぎは好まない。近くの森に隠しておく」

「よし。それじゃ今日の夜またここで会おう」

「了解だ」

そこで零斗とデュオは別れた。

そしてこの日、零斗は寝不足で授業中に眠り怒られた事は言うまでもない。

第二十一話…デュオ？ヒイロ？

とある森林

零斗と別れた後デュオは、ゼロを森林の中に隠していた。

デュオの姿は、身長は低く155cmぐらいで服装は袖無しのシャツ一枚とスパッツ。動きやすさを重視している。

ゼロを巧妙に隠した後、デュオは誰かに通信しているようだ。

「こちらヒイロ。アムロ大尉聞こえるか？」

《こちらアムロ。ヒイロ無事だったか：今何処にいる？》

通信先から聞こえるのは、二十代ぐらいの男の声だった。

（通信が繋がるという事は、この世界にいるのか）

「今は日本にいるようだ。そっちの状況は？」

《俺も日本にいる。νガンダムは海に沈んだけどな。どうにかして引き上げなければならぬ…》

「そうか、ならこちらの合流しよう。目印になりそうな所はあるか？」

《ああ、近くに陣代高校とか言う学校がある。かなり大きい学校だからな》

「了解した。俺がいる近く無かった場合は、また連絡させてもらう。今日の夜、ある協力者に会わなければならぬからな」

《わかった。じゃ通信終わるぞ》
通信を終えたデュオ：いや、ヒイロは歩き出す。

〔陣代高校〕

「本当か！また異世界から人が来たって！」
甲児が教室内で大きな声を出す。

「甲児：声大きい…」

零斗は声小さくするように指示する。

「あ…スマン…で、本当なのかよ？」

「うん、昨日の夜にね。おかげで寝不足だよ」

「だからお前、授業中寝てたのか」

「甲児だって爆睡してたじゃんか」

「お、俺はあれだよ…：そうだボスだって寝てたぜ！」

「ハイハイ、意味のない言い争いしない！」

さやかが会話に参加する。

ボスは今だに爆睡中。

「坂井、そいつはどういう人物だ？敵対するようなら、早めに抹殺するべきだ」

「どうだろうな…悪い人には見えないけど…：凄い威圧感があったよ。宗介に似ている感じ」

「宗介に似ている？そりゃマズイわ」

「千鳥さん…いつの間に…」

突然表れた千鳥に少し驚く零斗。

「少し退屈でね♪」

「ま、まあ今日の夜、また会う約束したから」

「よし、俺もついて行こう。坂井、護身用の武器を渡しておく。万が一の場合は、それでそいつを…」

宗介はそっと小型の銃を零斗に渡す。

「わわ！いい、いらないよこんなの」
直ぐに宗介に返す。

「ならこのサバイバルナイフを…」
ゴツツ

「やめんか！民間人を殺人犯にする気なの！？」

「しかたがない…小型爆弾を与える。そいつを敵と判断し、勝てない相手だったら、これで奴もろとも…」

メキャ！

宗介の顔が机に減り込み。

「千鳥さん…やり過ぎ…」

「これぐらいが丁度いいのよ！」

「ハハハ：それじゃ、宗介に頼みたい事があるんだけどさ」

「なんだ」

机にめり込んだせいか鼻が赤い。

「もしデュオが仲間になってくれた時の為に艦長に連絡しといてくれる？デュオの機体もダナンに置かなきゃいけないし」

「了解した」

ここで、デュオについての話しは終わった。

「そういえば、坂井君に甲児君、あとボス君とさやかちゃん、林水生徒会長が放課後来てって」
千鳥が言う。

「生徒会長が？ふーん：わかった。甲児達は？」

「俺はいいぜ」

「俺は辞めとくぜ！生徒会長なんか呼ばれたって嬉しく無いんだよ！：！」

「ダメ！ボスも行くわよ！」

「わかったよ：」

渋々了解したボス。

「にしても生徒会長が僕達なんかになんの用だろ？千鳥さん知ってる？」

「知らないわよ」私は連れて来いって言われただけだしね」

「そうなんだ」

生徒会長に呼ばれるような事をした覚えがない零斗は、頭に疑問詞を浮かべるばかりであった。

第二十二話…学園に来訪者…

…陣代高校（昼休み）…

「そういや、その弁当零斗の手作りか？
甲児が尋ねる。」

手には、購買で買ってきたコロッケパンがある。
ちなみに陣代高校の購買にあるコロッケパンは、かなりの人気で入手困難らしい。

その証拠に隣でしょぼくれているボスが。

「ちくしゅ…今日はコッペパンしか買えなかったぜ…」
コッペパンを口に頬張り、味気ないと言。
子分二人もコッペパンを持っている。

「ハハ…で、この弁当なら手作りだよ。今日は雑だけどね」
今日の朝は時間がなく、ほとんど素材そのままに入っている。

零斗達が話していると…

「お、皆いるわねー！」千鳥と恭子、それにさやか、女子三人組がやって来た。

千鳥の手にはカスタードパンとコロッケパン、他の二人は弁当を持っている。

「凄いなカナメ…」

甲児が呟く。

カスタードパンもかなりの人気があるらしい。

「あれ？宗介は？」

「宗介ならさっき『不審者を発見した、始末してくる』だって」

「そうなの♪って坂井君達なに呑気にしてんのよ!!」
千鳥が声を荒げる。

「宗介だって、いきなり人を撃ち殺したりなんかしないよ」

「撃ち殺したりはしないでしょうけど、相手を病院送りぐらいにはするでしょう!!」

「……確かに」

「皆行くわよ! 宗介を止めに!」

「え? まだ飯食って…」

「事が起きてからじゃ遅いのよ!」

「わかったよ…ボス行こうぜ」

「お、俺もか!」

「じゃ行ってらっしゃーい♪」

零斗は、にこやかに手を振る。

「坂井君も!!」

「えゝ…下手したら僕まで……あー…わかったから引きずらないで…」

千鳥一行は、零斗を引きずりながら宗介の元へ向かう。

一方宗介は。

く陣代高校校門前く

「目標発見」

不審者（?）を発見した宗介は、建物の影に隠れ相手の様子を見ている。

不審者と思われる人物は、茶色いくせつ毛の髪の二十代ぐらいの男性で、白っぽいワイシャツにジーンズを着ている。

「ヒイロから連絡は無し…か、しばらく待ってみるかな。ところで…その君、出てきたらどうだ？」

「なっ!!」

宗介は驚きを隠せなかった。

気配は、ほぼ完璧に消していたはずなのに相手に気づかれたのだ。

「しかたがない…」

そう言いながら宗介は銃の引き金に手をかけた。

第二十三話…銃撃戦？…

…陣代高校校門前…

銃口を相手の男に向け、いきなり発砲する宗介。一応、弾はゴム弾だが、成人男性を軽く戦闘不能にする威力はある。

男も宗介同様、建物の影に隠れる。

「こっちの学生はどうなっているんだ？」

男は武器を持っていないらしく、応戦が出来ず、さらに宗介の攻撃が激しすぎて逃げ出す事もできない。

「そこまでだ」

ターゲット目掛け、撃ちつづけていた宗介の後ろから青年の声がした。

そのうえ宗介の頭に銃を突き付けている。

「……………何者だ？」

冷静に対処する宗介。

今かなり張り詰めた空気が漂っている。

「お前には関係がない。大人しく銃を降ろせ、そうすれば見逃してやる」

「……………」

カチャ

宗介は銃を地面に置く。それと同時に、しゃがんだ状態で後ろの青

年に足払いをかける。

「くっ！」

青年は、地に手をつく。

宗介は、素早くもう一つの銃を取り、青年に向け少し距離をとる。

青年も、すぐに体勢を立て直し銃を宗介に向けた。

宗介が見た青年の姿は、小柄な体型で袖無しのシャツとスパッツを着ていた。

もちろんこの青年はヒロだが、宗介はヒロを知らない。

この場に零斗が居れば誤解は解けるのだが、あいにく零斗は、まだいない。

止める者がいない、両者が銃を持っている。

この事から、次になにが起こるか容易に推測できるだろう。

つまり

タタタタンッ！！

パン！

ズガガガッ！！

銃撃戦だ。

しかも激しい。

「お、オイ！ヒロ！止めろ！！」
遠くから男が叫ぶ。

「無理だ。動きを止めた瞬間奴はこちらを吹き飛ばす」
ヒロが冷静に答える。

「なら話し合いだ！その君！話しがあるんだ！銃を降ろしてくれ！」

「断る」

宗介は即答した。

「な!?!」

「テロリストの言う事なぞ聞けん」

「君! 勘違いしないでくれ! 俺達はテロリストじゃない!」

「銃を発砲してくる奴がテロリストじゃないだど? 信用できない。」

……………それに目つきが悪い」

宗介は撃ち続けながらもそう言う。

最後のはヒロの事で、千鳥の『相手の目を見て判断する』を宗介なりに実行しているのだろう。

これから両者どちらかが倒れるまで撃ち合いが続くかと思いきや。

「こっんの…おバカ軍人…!!」

千鳥の声が鳴り響き、宗介の横腹目掛け、石が投げられた。

……………拳なみの石が。

「ぐっ!!」

あの宗介が顔を歪めている。

とてつもなく痛かったのだろう。

しかしすぐに元の無表情に戻る……………顔中汗だくだが。

「…千鳥…もう少しであればらが折れていたぞ…後…俺は軍人ではな

…い」軽い呼吸困難で喋りにくそうだ。

「アンタねえ…なに学校の目の前で撃ち合いしてんのよ! 友達あれ

!?
」

「友ではない…応戦しなければ…俺が…やられていた…」

一方ヒロは・・・

「ストローツプ!!デュオ!」

零斗が止めに入った。

せっかく見つけた協力者を死なせる訳にはいけないので、ヒロは銃を降ろす。

「ここの生徒だったのか」

「う、うん…そうだよ…ってなんで宗介と戦ってるんだよ!」

零斗はヒロに聞いた。

「奴が俺の仲間を撃とうとしてたからだ」

「そうですか…まあ、宗介も僕達の仲間だから」軽いため息をつきながら零斗は言った。

「了解した」

「わかってくれてありがと…じゃひとまず僕らは教室に戻るから、あの公園で待ってて」

「いいだろう」

零斗は話しを終え、今度は宗介達の元へ行く。

宗介の方には甲児達も居た。

「じゃ、教室戻ろうか！ん？どしたの？」

「零斗：周り見てみろよ」

甲児が少しくたびれた感じで言った。

「周り？」甲児に言われ周辺を見渡す零斗。

「うわぁ：これ全部さっきので？」

陣代高校前の民家数軒の壁が銃弾で無惨な事に。

「おそろくね：」

千鳥が言い、皆が頷く。

「：…すまない」

宗介が申し訳なさそうに言った。

「どうする？」

「どうしよう：」

皆この状況をどうするか頭を悩ませる羽目になった。

そして午後の授業の時間は刻々と近づいて来るのだった。

第二十四話…林水生徒会長…

…陣代高校生徒会室…

結局さやか、恭子を抜いたメンバーで壁の修理をし、家主に謝罪して、なんとか事を得た。

ちなみにヒロと仲間の男は、さっさといなくなっていたので修理作業には加わっていない。

修復代は後日ミスリルから支給された。

そして放課後、生徒会長に呼ばれた零斗、甲児、ボス、さやかは、陣代高校の生徒会室に来ていた。

四人は林水生徒会長の前に並び、千鳥、宗介は後ろで待機する形に。

「いや、すまないね。突然呼び出してしまった」

「いえ…気にしないでください」

林水敦信、陣代高校の生徒会長だ。

髪はオールバックで、面長の顔だちで、細い両眼、真鍮フレームの眼鏡をかけ、高校生とは思えない静かな威厳の持ち主である。

「かなり疲れているようだが？」

「あ、それは…その…」

慌てふためく零斗。

疲れているのは当然である。残り少ない休み時間ではとても修理できないので授業をサボり、必死で修理作業をしたからだ。その動き鬼神の如く。

「フッ、隠さなくて良いよ。昼の件も私は知っている。まあ、学校前であれだけ騒げば誰でも気づくと思うが」
薄い笑いを浮かべ林水会長は言った。

「知ってたなら手伝ってくださいよ先輩……」
後ろで千鳥がくたびれた感じで言う。

「ふむ、私も生徒会のメンバーを送ろうと思ったが……思いのほか君達の作業が早くてね、増援はいらないと判断したのだ」

「いや……手伝いが来てくれれば、あんなに急がなかったのに……はあ」
肩を落とす千鳥。

「代わりと言ってはなんだが、午後の授業については公欠扱いにするよう、担任の教師に伝えてある」

「おお！流石先輩！ありがとうございます」
さつきとは打って変わり、千鳥は感嘆の声をあげる。

「林水生徒会長？そろそろ僕達を呼んだ理由を……」
「そうだった。君達には、安全保障問題担当である相良君の補佐……ようするに手助けをしてやって欲しいのだが」

「会長さん、なんで俺達なんだ？」
甲児が尋ねる。

「当然の疑問だな。では、説明しよう。初めて君達を見た時、なにか相良君のような、特殊ななにかを感じたからだ。幸い相良君とも仲が良いようだからね」
林水生徒会長は淡々と話した。

「……………それだけですか？」

零斗が言う。

「それだけだが？ なにか問題があるのかね？」

「フッ！ このボス様に目をつけるとはな…良い目してるじゃねえか」

「君は……………ふむ…………やはり君、帰っていいよ」

「な、なにをおお！ こ、このボス様を馬鹿にしたな！ よし！ 誰がな
んと言おうと、俺はその安全なんたらをやってやるぜ！ テメエをぎ
やふんと言わしてやる！」

「別に構わんよ」

「あら、いやにあっさりじゃねえか…」

少し拍子抜けしたボスであった。

「やる気がある者を、わざわざ無下にする必要もあるまい」

「？ お、おおその通りだぜ！」

ボスには『無下』の意味がわからないようだ。

「で、他の者はどうする？ 強制はしないが」

「ハイ、別に暇ですから僕はいいですよ」

「じゃ、俺もやりますか」

「うーん：私はやめときます」
さやかは断る事にした。

「アレ？ どうしてだ？ さやかさん」

「えーだって宗介君には、ついて行けないわよー」

「まあ、確かにアイツの手伝いって大変そうだしな」

「わかった。では、ボス君に兜君、それに零斗君は、安全保障問題
担当補佐に任命しよう」

「ハイ！」

こうして零斗を含む三人は、宗介の補佐として働く事になった。

第二十五話・・安全保障問題担当補佐就任（前書き）

あまりにも二十四話の出来が悪かったので多少書き直しました！

第二十五話…安全保障問題担当補佐就任…

…陣代高校生徒会室…

「ところで会長、補佐って具体的になにやれば良いんですか？」
零斗は林水会長に尋ねた。

「仕事は簡単だ。例えば相良君を目の敵にしている不良共が、大勢で攻めてくるとしよう。さすがの相良君も、多勢に無勢では少々苦しい場面もあるかもしれない。そんな時君達は彼の味方をしてくれ。それ以外は彼と同じ仕事だ」

「……………」

言葉が見つからない零斗と甲児。

何故、安全保障問題担当が大勢の不良に敵対されるのだろうか。

しかも零斗達に、その闘争に加われと言うのだ。ボスは

「そんなもん全部この俺様に任せておけば、ちよちよいのちよいだわさ！」

「しかし会長閣下、甲児ならともかく、坂井は戦力にならないかと」
後ろでムツツリ顔の宗介が口を開く。

さらにボスが『俺はどうなんだ！』と騒いでいる。

「ふむ、それもそうだな」林水会長は、腕を組み頷く。

「いやいや、喧嘩なんて元々やる気ないですよ！」

両手を振り、かぶりを振る零斗。

「よし相良君、君は安全保障問題担当補佐の教育と同時に、坂井君

自身の鍛練を頼む」

「了解しました！甲児、坂井共に、立派な安全保障問題担当補佐に育て上げて見せます！」

宗介は林水会長に敬礼した。

「だから俺を無視するなー！！」

「宗介程々にしなさいよ…」

「よろしく頼んだよ。では、これで話しは終わりだ。全員帰っていぞ」林水会長は椅子に腰を降ろし、雑誌を手にとる。

「僕の意味は無視ですか…確かに手伝うとは言ったけどさ…まさかそんな手伝いとは思わないって…」

ぶつくさ言いながら生徒会室を出る零斗。

他のメンバー達も退室する。

（二年四組教室）

帰り支度の途中、宗介が少し顔色を変えて皆に話し出した。

「皆聞いてくれ。たった今、東京湾に例の軍団が現れた。しかもかなりの数らしい」

ダナンから、機械獣軍団が来たと連絡があったようだ。

「へ！この所動きがないと思ったが、ようやく来やがったな」

久しぶりの敵に甲児が勇む。

「デ・ダナンが日本に向かっている。到着するまで坂井、奴らの足止めを頼む。俺も出来るだけ足止めする」

「わ、わかった」

「な！カイザー無いのかよ！」

マジンカイザーやアーバレストは、ダナンにあるため、すぐに攻撃できないのだ。

「少しの辛抱だ。すぐに大佐殿が来てくださる」

「しょうがねえ…一応俺達も港行くぜ！」

「よし、すぐに出発しよう。俺はスクーターを借りる。坂井は兜のバイクに乗っていけ」

「お、俺はどうすんだよ！」
ボスが慌てた感じで言う。

「知らん。後で来い」

零斗、宗介、甲児は教室を出て外に向かう。

残されたさやか、千鳥、ボス。

（東京湾）

「着いたぜ！」

甲児が叫ぶ。

「なんて数だ…」

敵の機械獣は、およそ二十機いた。
前回の十倍である。

『キシャー！ー！』

『グォグルル…』

『ガァァ！』

「じゃ、行ってくる」

零斗はバイクを降り、時斗を出そうとする。

「大丈夫かよ零斗」

甲児が心配する。

それに宗介が、俯きながら続く。

「すまないが、なんとか持たせてくれ」

「できる限り…が、頑張るよ！………すう…時斗行くよ！」

軽く深呼吸をして時斗を出す。

辺りに光が広がり、白銀の機体が現れる。

第二十六話…機械獣強襲…（前書き）

少し遅れました…

すみません m () m

第二十六話…機械獣強襲…

…東京湾…

「たアーーー!!」

零斗は剣を構え、機械獣に突進する。

「兜、これを使え」

機械獣達から少し離れた場所に、宗介と甲児が居た。

宗介は甲児に手榴弾を渡す。

「……なんだよこれ」

怪訝そうな顔をして、甲児は聞いた。

「手榴弾だ。今持っている中では、これしか奴らには効果はないかな。対戦車用ロケットランチャーを常備しておくべきだった…」
悔しそうな顔をする宗介。

むろん、そんな物を常に持っていれば千鳥をぶっ飛ばされるだろう。

「よし、武器は持ったな。行くぞ！ピンを外すタイミングを間違えるな」

「おうよ！」

宗介と甲児は、生身で零斗の援護に行く。

手榴弾と軽い装備だけで、巨大ロボットに挑む…勇気か…無謀か…。

「うおおおお!!」

機械獣の一機に体当たりをかける零斗。

その衝撃で機械獣は、よろめく。

「隙ありっ！」

一瞬の隙を見逃さず切り付ける。

そして機械獣は真っ二つになり倒れる……が

『キシャー……』

いつの間にか時斗を取り囲んでいた機械獣達が、一気に襲い掛かる。

やはり多勢に無勢……一機だけで戦うには、敵の数が多過ぎるのだ。

「くう……駄目だ……倒そうとすると、どうしても隙が出来ちゃうな……
……うん、足止めだけに専念しよう！」

今度は敵を倒そうとせず、なるべく攻撃を受け流し、回避に専念する事にした。

『ゴアアオオオ』

『キシャー……』

バキィィィ！

「うわァ！」

攻撃をなんとか受け流していた零斗だが、背後からの一撃が時斗を襲う。

いくら時斗が優れた機体とはいえ……零斗はまだ数回しか乗っておらず、しかも零斗は普通の高校生だ。

身体能力に優れているわけでもない、実戦慣れもしていない。

そんな零斗が、二十数機の攻撃を受けきれないわけがないのだ。

徐々に追い詰められていく。

甲児と宗介の援護もあるが、ほとんど効果が無かった。

ふと甲児が呟く。

「おかしいな…」

「なにがだ」

「機械獣がダブラスとガラダしかないんだよ」

「それが奴らの主戦力じゃないのか？」

「いいや…もっと強力な機械獣はたくさんいるはず」

「フハハハハ！兜甲児よ！その理由、私が教えてやろう！」
上空から、男と女の声が同時にした。

「デメエ…あしゅら男爵！」

甲児が上空に向かって叫ぶ。

そこにいたのは、黒い円盤のような物に乗ったあしゅら男爵がいた。

「フン、兜甲児。何故ダブラスM2とガラダK7ばかりが居るのはな…Drヘルが、ある機械獣を造り出す為にこの二機を大量生産したからだ！！見よ！Drヘルによって、新たに生まれ変わったガラダK7とダブラスM2…ガラダブラMK01を！」

叫びながら両手をあげたあしゅら男爵。

その上から巨大ななにかが降りて来た。

それは所々に、ガラダK7とダブラスM2の特徴を合わせた機械獣だった。

第二十七話…増援…（前書き）

総アクセス数10000Hit越えましたー！

この作品を読んでくださっている方々…本当にありがとうございます♪

これからも『時旅』をよろしくお願いいたします！

第二十七話…増援…

…東京湾…

その巨大で派手な羽を羽ばたかせ、ゆっくりと地上に降りるガラダブラMK01。

あしゅら男爵はその様子を、薄気味悪い笑みで見ている。

「マズいな…逃げるぞ兜!」

宗介は手持ちの手榴弾を投げきり、後方へ走り出そうとする。

「なんでだよ?」

突然の逃避宣言に疑問を持つ甲児。

「あの機体のターゲットは……俺達だ」

今生身である甲児達にとって、かなり…軽く命を落とすぐらい深刻である。

「マジかよ…」

宗介と共に全速力で走り出す甲児。

目指すは、自分達が乗ってきたバイクである。

しかし、バイクまでそんなに距離がないとしても、ガラダブラMK01はすぐに迫って来た。

既に射程範囲に、甲児達は入っている。

「くくく…やれ!ガラダブラMK01!につくき兜甲児とその仲間を踏み潰すのだァァ!」

あしゅら男爵は高らかに声をあげる。

「くそ！甲児…宗介…！」

零斗は今、他の機械獣に取り囲まれ身動きできない状況にある。そして、現在絶対絶命の仲間二人に対して叫んだ。

スガー…！！！！

突如、ガラダブラMK01にまばゆい閃光が襲う。

何事かと周りを見渡すガラダブラMK01とあしゅら男爵。

すると上空に、青と白のカラーリングの人型機動兵器が、優雅に白く神々しい翼を羽ばたかせていた。

両手には、大型のビームライフルが構えられている。

「な、何者だ！貴様！」あしゅら男爵が、上空に向かって声を荒げる。

「……………」

返事はない。

「デュオ……デュオだ！」

零斗は歓喜の声を出した。

その機体は確かに、昨晚ヒイロが乗っていたウイングガンダムゼロカスタムだった。

ウイングガンダムの外部スピーカーから声がする。

「…その二人さっさと逃げろ。邪魔だ」

冷淡としたヒイロの声が甲児と宗介に向けられた。

「な、邪魔だと」

不意に甲児の怒った。

しかし宗介は：

「奴の言う通りだ。ここは退くぞ。もうすぐダナンも来る」

「ちっ：わかったよ」

甲児と宗介はその場を離れる。

「その白い機体。乗っているのは零斗だな？」ウイングガンダムを時斗の方に向かせて、ヒロは聞く。

機械獣の攻撃を避けながら、零斗は時斗の両腕で大きく丸を作る。突然の増援で、機械獣のAIも少し混乱しているようだ動きが鈍い。

「了解。こっちのデカイのは、俺に任せておけ。そっちはなんとか持ちこたえろ」

「フン、俺も居るぞ。サンダーブレイク！」

時斗を、囲んでいる機械獣数機に稲妻が落ちる。

稲妻を喰らった機械獣達は黒焦げになって倒れ込む。

この技を使えるのは：

「グレートマジンガー、偉大なる勇者だ」

黒く光ったボディを輝かせ登場したのは、グレートマジンガーとそのパイロット、剣鉄也だ。

「く：おのれ！全機械獣！現れろ！」

またもあしゅら男爵が叫ぶ。

次々に海から現れる機械獣。

今度は様々な機体がいる。

「行け！まだ敵は、たかが三機だ！数で押すのだ！」

それだけ言ってあしゅら男爵は何処かへ飛んで行った。

「零斗！すぐに兜達の機体も来る！それまでに……奴らを叩き潰すぞ！」零斗に向かって言った後、鉄也は機械獣に意気揚々と向かって行く。

それに続いて零斗も気合を入れ直す。

「ブレストバーン！」

「ヤアアアア！！」

「ターゲットロック…ツインバスターライフル発射！」

鉄也はグレートマジンガーの赤いVマークから高熱光線を機械獣に浴びせ。

零斗は時斗の大剣で一刀両断。

ヒロはツインバスターライフルで、ガラダブラMK01を貫いた。

劣勢から一気に優勢に変わった。

そこへさらに増援が

「ターボスマッシューパーアアアアンチ！！」

ダナンから撃ち出されたマジンカイザーに乗った甲児。

その横には同じくアーバレストに乗った宗介が居る。

「へへ、兜甲児様のご登場だ！」

「かなり遅れてだがな」

「うるせー！真打ちはこれで良いんだよ！」

甲児は、冷静にツッコミを入れる宗介に凄む。

「つてなんだ…もう雑魚しかいねえじゃねえか」少し落胆したそぶ
りを見せる甲児。

「油断するな。追い込まれた敵は、どうでるかわからんぞ」
またも宗介は、冷静にツツコミを入れる。

「ヘイヘイ…」

軽いやり取りを終え甲児達は、残りの機械獣に突撃する。

それから彼らは、次々と機械獣を倒していった。彼等の戦闘力は凄
まじいもので、一機倒すのに十秒とかからなかった。

アーバレストの単分子カッターは確実に弱点を突き。

グレートマシンガーとマシンカイザーは、そのとてつもない威力の
武器で楽々機械獣を吹き飛ばす。

ヒロは上空から射撃で援護し、零斗は一機一機確実に切り裂いて
いる。

そして最後の一機が倒れ、この戦いが終わったと思われたが…
海面から数個黒い影が浮かび上がる。

その黒い影が本体現したと同時に、またあしゅら男爵の声が東京湾
に響く。

「フハハハハ！まだ終わらないぞ！」

現れたのは、全身至る所にイボイボがついている所々悪趣味な感じ
があるグレートマシンガーに似た機体四機と、ガラダブラMK01
二機だった。

第二十八話…怒る甲児

（東京湾）

新たに零斗達の前に現れたのは、あしゅら男爵とガラダブラMK01…そして謎のマジンガーだった。

その謎のマジンガーを見た甲児は、一瞬顔が凍りつき一言呟いた。

「マジンガーZ…」
と。

「甲児？ どうしたの？ …ああ、もう！ 通信機ぐらい付けてよ！」
零斗はコックピット内一人で騒ぐ。

《なんだ？ 奴らと話しがしたいのか？》
一応一人ではなかった…。

「うお！ 時斗！ いきなり話しかけないでよ！」

《話しがしたいのなら繋げてやろう》

「…じゃあ頼むよ」

こちらの発言を無視されて、少々不相応に答える零斗。

シュンという音がして、コックピット内に甲児の顔が映る。

「甲児、どうしたの？」 さっきと同じ事を聞く。

「くそ！ あしゅら男爵のやろう！ マジンガーZを出してくるなんて！」

「甲児！」

再び甲児の名を言う。

「ん？零斗？お前いつの間に通信機を…」

ようやく零斗の存在に気づく甲児、まだ少し顔は強張っている。

「あれってマジンガー…だよね？」

「ああ、元俺が乗っていた機体…マジンガーZだ…ヤロー、マジンガーを改造してきやがった」

甲児が、こっちの世界に来る前の戦いでマジンガーZは大破・あしゅら男爵に回収されてしまったのだ。

「二人共来るぞ」

宗介が二人に注意を呼び掛ける。あしゅら男爵もマジンガーZ…あしゅらマジンガーに乗り込み攻撃をしてきた。

「ロケットパンチ！！」

あしゅら男爵の声と同時に、四機のあしゅらマジンガーがロケットパンチを繰り出してきた。

迫り来る八つの鉄の拳。

各パイロット達は、鉄拳を逸らし避けた。

零斗を除いて…

「ぐふう！」

奇妙な声を出して後方へ飛んで行く零斗（時斗）。

「いてて…ん？」

起き上がろうとした時ある物が目に入った。

それは……人だった。

只の一般人ではない、カメラを持った男性とマイクを女性。そうテレビ局だ。

戦闘場所から少し離れた所でこちらを撮影しているようだ。

「ま、いいか…」

たいして気にとめなかった零斗。

その訳は、ミスリルは今までもかなりの情報操作をして、宗介・アーバレストの事を隠し続けてきた。

そのおかげで宗介は学生生活を送ってきたのであり、この前の戦闘もテレビに取り上げられなかったのだ。今回もミスリルが記録を削除してくれるだろう。それが零斗の考えである。

しかし、ある可能性を零斗は頭に浮かべなかった。

生放送であるという事を。

「あしゅら男爵！ テメエなんかにマジンガーを使われてたまるかよ！」

甲児はマジンカイザーで、あしゅら男爵の乗るあしゅらマジンガーに殴り掛かる。

「フン、このDrヘルの手によってパワーアップしたあしゅらマジンガー…そう簡単には…」

「ルストトルネード!!」

あしゅら男爵の言葉を遮り甲児はルストトルネードを出す。
それにより、あしゅらマシンガーの体は徐々に腐食していく。

「ええい! ガラダブラMK01! マジンカイザーを止めろ!」

上空に居たガラダブラMK01はマジンカイザーに狙いをつけ、突進する。

『グギヤヤアアア』

「やらせん!!」

ガラダブラMK01がマシンカイザーに激突する直前、鉄也はグレートマシンガーを盾にして、マジンカイザーを庇った。

ガラダブラMK01との激突による衝撃で超合金Zのボディにひびが入り、グレートマシンガーはその場に倒れる。

「鉄也さん!」

甲児は鉄也の名を叫ぶが返事がない。グレートマシンガーも仰向けに倒れたままだ。

「くそオ! テメェらよくも鉄也さんを!」

最大出力のファイヤーブラスターで、ガラダブラMK01を鉄の塊に変える。

もう一体のガラダブラMK01もヒロが撃墜した所だ。

残るはあしゅらマシンガー四機。

甲児はあしゅらマシンガーの一機にターボスマッシャーパンチを繰り出そうとする。

しかし零斗はある事に気づく…

あしゅらマシンガーの後方には、先程のテレビ局の人達がいる事に…

「甲児！待って！」

零斗は甲児を制止しようとするが怒りで聞こえてないのか、止まる気配がない。

「くそ！甲児の馬鹿ヤロウ！」

軽く毒づき、時斗のブースターを全開にして、あしゅらマシンガーの後ろにまわる。

「鉄也さんの敵だ！タアアアボスマツシャアアアアアンチ！
！」

マシンカイザーの腕が、高速回転をしながら真っすぐあしゅらマシンガーに向かって行く。

しかし、狙いが上手く定まっていなかったのか、肩を掠ってさらに後方に飛んでいった。

「間に合え！」

零斗は、時斗の腕部分の装甲を変化させて巨大な盾にした。

そして正面からターボスマツシャーパンチを受ける。あまりの衝撃にのけ反りそうになるが、なんとか耐え切る事ができた。

「れ、零斗！なにやってんだ！」

零斗の行動で甲児の怒りが少し和らぐ事になった。

「怒りは兵士の状況判断を鈍らせる。周りをよく見るんだな」
珍しくヒロが口を開く。

その言葉に甲児は自分が放った攻撃の方向に民間人がいる事に気づいた。

「あ、ああ…すまねえ零斗…」

今、取り返しのつかない結果になったかもしれないと考えると意気消沈する甲児。

「気にしないでよ！さっさと奴らを片付けよう！鉄也さんが心配だ」
零斗は、なんとか元気づけようとする。

今この瞬間にも、あしゅらマジンガーはこっちに狙いを定めている。
宗介達がいなければとっくに撃墜されているだろう。しかし、いくら宗介とヒロでも超合金Zの装甲を破るのは容易ではない。
段々と力負けして来た。

「さ、早く行こう！」

「…ホントすまねえ…おし、行くぜ！ここからが兜甲児様の本領発揮だぜ！」

「うん！それでこそだ」

仕切り直しあしゅらマジンガーに向かう零斗と甲児。

第二十九話…東京湾の戦い終結…

…東京湾…

なんとか持ち直した甲児だが、マジンカイザー以外の味方の機体は既に傷だらけだ。正面からの攻撃には耐えられそうにない。

一方あしゅら男爵の方は、一機は体の一部が腐食して動きが鈍く、もう一機も肩が吹き飛んでいる。

だが、残りの二機はほとんど無傷に近い。

この状況を見て宗介は作戦を練り、皆に伝えた。

「敵を撃墜するには、アーバレストやその白い機体、零斗の機体ではパワー不足だ」ならどうするか、それはアーバレスト・ウイングガンダム・時斗であしゅらマシンガーの動きを封じて、一撃必殺の力を持つマジンカイザーで確実に一機ずつ沈める。それが宗介の案だった。

「いいだろう、ゼロも出力が低下しているからな。それに賭けよう」

「僕もいいよ、なんとか奴らの足を止めてみせる！」

「そういう事だ、頼むぞ兜」

「お、おお！任せろ！」

意気込む甲児。

他の三人もそれぞれ精神を集中する。

「私は後ろで援護をする！お前も後方で援護だ！」

肩を負傷しているあしゅらマシンガーを指さして、あしゅら男爵は指示をする。

「お前らは特効あるのみだ！この戦いに負けたら、Drヘルに会わせる顔がない！死ぬ気でかれ！」

「よし！各機作戦通りに行くぞ！」

宗介は、細やかな指示を伝え、決戦の合図をする。

まず、あしゅら男爵が乗ったマシンガーが先手を取りロケットパンチを発射した。

それについて隣のあしゅらマシンガーもロケットパンチを発射する。

それを半数はヒロが撃ち落とし、もう半数は零斗が盾で防ぐ。

「フン！こんなの甲児の攻撃に比べたら屁でもないね！」

その隙に宗介は、前に出ているあしゅらマシンガーに接近。

あしゅらマシンガーは、向かってくるアーバレストにブレストファイヤーを発射する。

宗介は機体を反らし上手く避わして

「そこだ！」

あしゅらマシンガーの足元にグレネード弾を発射、えぐられた地面に足をとられ、その場に倒れる。

「今だ！甲児！」

零斗が叫ぶ。

「ファイヤーブラスター!!」

マシンカイザーの胸部から、倒れたあしゅらマシンガー目掛け超高熱光線が放出される。

ファイヤーブラスターを喰らったあしゅらマシンガーは、瞬くまに溶けて只の鉄の塊となった。

「オッシャー！」

甲児はコックピット内でガッツポーズをとる。

「油断するな。まだ三機残っている」

ヒロが甲児をたしなめる。

「ヘイヘイ…たく…マジで宗介みてえだな、アイツ」

「お、おのれえ…こちらは一機を集中的に狙う！まずはあの羽が生えた機体からだ！」

あしゅら男爵はウイングガンダムに狙いをつけ、各あしゅらマシンガーに指令を出した。

「ブレストファイヤー!!」

三機同時にブレストファイヤーをウイングガンダムに向かって放つ。

直後ウイングガンダムの目の前に黒い影が現れる。
マシンカイザーだ。

（数分前）

「おそらく一機か二機倒したら、奴も一機ずつ潰す策に出るだろう」
宗介は自分の推測を皆に話した。

「オイ、それじゃどうすんだ！誰かを犠牲にするなんて、俺はやだぜ」

「確かに俺か零斗、それと…」

「…………ヒロだ」

「え？デュオじゃないの？」

「後で話すこれが本名だ」

ヒロがついに本名を明かす。

これは、ヒロが零斗達を信頼したという印だろう。

「ではヒロが集中攻撃を喰らったら百パーセント沈む」

「なら…どうすんだよ？マシンカイザーが盾になるのか？」

少しぶっきらぼうに甲児は言う。

「そうだ」

「へ？だ、だって宗介。相手が攻撃してきた時がこっちのチャンスだろ？攻撃の要のマジンカイザーが盾になったら後どうするの？」
零斗が問う。

「大丈夫だ。二、三機同時攻撃ということは、同時に隙が出来る。だからこっちも相手全員が隙がある間に一機に集中攻撃する。それも一点集中頭部にだ」

「できるのそれ？」

恐る恐る尋ねる零斗。

「やるしかないからな」

「了解…ふう」

（現在）

「マシンカイザーを盾にしただと！ふん、軟弱なロボット達であしゅらマシンガーが倒せるとでも思っているのか？」

「各機、頭部へ集中攻撃だ！」

また宗介の掛け声で、零斗は腰にある中型ビームガン二丁を、ヒイロはバスターライフル、宗介は散弾砲

「ボクサー」をあしゅらマシンガーの頭部目掛け一斉放射する。

三機の攻撃が一点に集中した事で、強固であるあしゅらマシンガーの頭部は跡形もなく吹き飛び、地響きをたてて倒れた。

「な、なんだと…」

あしゅら男爵は零斗達の攻撃に驚き、今自分は窮地に追い込まれている事に気づく。

残るあしゅらマシンガーは負傷した二機だけだ。

いや…

「タアアアボスマッシャアアアパアアアンチ！」残り一機になった。これはあしゅら男爵が判断を鈍らせ指示が遅れた結果だ。

「いいタイミングだ兜」

宗介が珍しく甲児を褒める。

「へへ、だろ？」

鼻を指でこすりながら甲児は自慢気に言う。

「さ、どうするあしゅら男爵？ 後はお前だけだぜ？」

「ぬぬ…おのれ兜甲児…撤退だ！！ 覚えておけ兜甲児とその仲間達よ！」 あしゅらマシンガーを後退させるあしゅら男爵。零斗達は追撃をしようとするが、既に機体にエネルギーが残されていないかった。

こうして東京湾での戦いは終わり零斗達は一旦ヒイロを連れてデ・ダナンに向かう。

その際、マシンカイザーはグレートマシンガーを担ぎ、甲児は急いで鉄也さんを医務室へ運んだのだった。

第三十話：くどうしよう…く（前書き）

更新遅れてすみません…

でも話の内容長くしました！

なにかミスがあったら報告お願いします！

ちなみに主人公目線の話です。

デュオ：じゃなくてヒロか、ようやく喋ってくれたよ…会議が始まってから一言も喋らないんだからさ…まあ、警戒してるんだろうけど。

「なんでだよ！俺達は悪い事してるわけじゃねえだろ！」

ちよ、もう少し落ち着いて！
とりあえず甲児を宥める僕。

「俺達が公に出れば、軍にすぐ吸収されるだろうな。そうならば他の国との戦争にも手を貸さなければいけないぞ？」

そうか…

説明ありがとう宗介！

「じゃ、じゃあどうする？もう僕達の事世間に知られちゃったんでしょ？顔はバレてないだろうけど…」

生まれて初めての会議に緊張してるな僕…

「今まで通りに生活すればいいだろう。顔がバレてなければなんともなる」

そりゃそうだけどさヒロ…でも今のままでいいのかなホントに…

「いくつか案を出しましょう」

お、テッサ艦長！

マデューカスさんはいつも通り無表情か…ずっと前だけを向いてるけどなにを見てるんだろう？

同じ所しか見てなくて飽きないのかな？

「まず一つ、さっきヒロさんが言ったように、今までと同じように生活をして、敵襲撃時には世間バレないように出動する」

うーん…それがいいんだろうけど…いつかはボロが出るよね今日みたいに。

それに戦いのたんびに、周囲を封鎖するのはいくらなんでも怪しまれるよ…

「二つ目は、普通の生活を捨てて、戦いのみに専念して、敵襲撃時のみ陸に上がる」

え？

「ちょ

「大佐殿！それでは千鳥は…」

僕の言葉を遮り声を荒げる宗介…初めて見たよこんなに動揺するところ。

「まだ、仮定の話ですよ相良さん」

良かった…今の生活を捨てるなんてできないよ。宗介も安心したようだ。

「三つ目は…ここ、日本にどこの軍にも属さない独立組織を創り、異世界からの襲撃に対応する」

え？

また別の意味で驚いた。皆も…ヒロ以外は哑然としてる。

「そんなの創れるんですか？」

僕は頭の中にある疑問を口に出す。

「もちろん、簡単な事ではないでしょうね。まず日本政府を納得させないと組織を創っても無駄ですから」

でも：それが1番いいんじゃないのかな？

それが出来れば堂々と悪党どもを退治できる！！

「しかし大佐殿：もしその組織が出来たとしても、ミスリルは支援できなくなるのでは？」

僕は宗介の言葉の意味がいまいち理解できなかった。頭悪いですからね：ハハ：

「そうか：どこの軍にも属さないって事はミスリルも手助けできないって事か：」

こ、甲児君：君は：仲間だと思ってたのに

「それについてはなんとかします。例えば、こちらが勝手に支援してるだけ。こっちの戦いへの協力は強要していない。みたいな言ってごまかすとか：」

意外と腹黒いかもしれないこの子：：はあ、もう訳わかんないから退場するよ：

僕は、そつと会議室から出る事にした。

そしてやることもないから甲児達やミスリルの機体が置いてある格納庫へ。

くデ・ダナン格納庫く

んく！おもいつきり体を伸ばす！はあ…いやく自由っていいね！大袈裟か…

周りを見渡すと、整備士の人達が数人と、マシンカイザーにアーバレスト、ゼロ…後はM9二機がある。

…あの二機はクルツさんとマオさんのかな？

二人共パイロットって言ってたし。

グレートマジンガーは修理中か…鉄也さん…大丈夫だよね…

ま、とりあえず時斗出すかな！格納庫も空いてるし、聞きたい事もあるしね。

僕は指輪を掲げて時斗を呼び出す。

今回は僕が外にいる状態にした。

指輪から光が溢れ、またそれが集まり時斗が現れた。

やっぱりカッコイイなあ…所々に施されてる金の装飾、神々しいまでの白銀の装甲、時斗の全長に近い大きさの大剣…

初めてこんなにまじまじと見たけど…惚れ惚れするね！

と、時斗に魅入っていると誰かが近付いてきた。

「あら、零斗じゃない？どうしたのこんな所に？」

マオさんか…少し苦手です…口には出しませんが。

「いや、ちょっと退屈だったもので」

とりあえず普通に返事しておくか。

「ふうん…あ、これアンタの機体？へへ洒落てるじゃない」

「ありがとうございます！」

「……プツ」

また笑われました。

「ゴメンゴメン！ありがとうって聞いたら前の事思い出してね！」

だからこの人苦手です…すぐに人をからかうタイプだから！

「ま、まあ、気にしないで！この機体について詳しく話してくれない？」

無意識の内に睨んでたらしい…気をつけなければ…

「…そういえば誰も時斗について聞いてこないんですよ〜こんなにも未知な機体なのに…」

自分の機体に未知ってのもどうかナ…

「アタシはもの凄く気になる！なんか綺麗だしさ〜」
う、自分が褒められてるみたいで嬉しい…

「じゃあ説明しましょう！誰も聞いてこないから少し落ち込んでたんですよ！まず、この機体には自我があります！」

胸を張り堂々と言う。

「は？」

目が点になってますね。

「信じて下さいよ！ホントですってば！」

「それってA Iの事じゃないの？」

フ：A Iが夢の中に出てくるもんか！

「A Iじゃないですよ！初めて時斗に乗った時に話しかけてきたんですよ！頭の中に直接！」

「…正直信じられないけど…まあ、いいわ。他には？」

「ええと、見たかもしれませんが、この指輪から出すんですよ。持ち運ぶに便利です」

「ふ、ふーん…それで？」

「この機体の装甲をある程度変化させる事ができます。例えば腕の部分に盾にしたり」

「…それって全部本当なの？」

まだ信じてないか…
しょうがない！

「じゃあ今から乗ってみますね！」

「乗るって：そういうえばコックピットハッチは？」

「ありませんよ？」

またマオさんは目が点になって、意味がわからないという顔になっていたけど、僕はかまわず時斗に乘る事にした。

僕が指輪を時斗の胸部にある黒い球体に手をかざすと、僕は瞬間移動してコックピットの中に行く。

コックピット内は、ほとんどすべての壁がモニター画面のようになっていて外の映像を映す。

モニターからマオさんを確認して僕は時斗の能力を見せる事にする。

「えーと変化する装甲をイメージと：」

僕は頭の中で腕の部分を盾のようにイメージする。すると、イメージ通りに立派な盾になった。

「あの戦いの時は無意識にやってたけどやっぱり凄いな：」

マオさんも哑然としているようだ。

そりゃ目の前で無機質の物質が、あんな風に変化なんかしたら驚くよね。

色んな難しい法則無視してるもん。

「そうだ、時斗！」

《なに用だ》

「うん、ちょっと時斗の事詳しく知りたくてさ。」

《今は先刻の戦いの傷を癒しているのだがな》

「僕も外で人待たせてるから短く頼むよ」

《…いいだろう、ただし…まだ我が言える事は限られている》

「うん、いいよ」

《ならば、まず私の能力についてだ》

僕は無言で頷く。

《私の武装は…》

それから僕は時斗の武装・能力についていくつか説明…というより頭に情報を流してもらった。

それと、この情報を直接脳に伝えるのはかなり危険が伴うらしく、一度に限られた量しか教えないらしい。

その限られた量を越えると頭がショートして平常ではいられなくみたいだ。

下手すれば死に至るらしい…

マズイなんか怖くなった。とりあえず時斗に聞けるだけの事聞き、僕はそのまま外に出た。

「お、お帰り…ホントに凄いのねえ…これ」

マオさんは時斗を見上げて言った。
まあ：僕もビックリな事ばかりですから：

「零斗：悪いけど私部屋戻るわ：頭が混乱してきた：また話し聞かせて」

頭を抑えながらフラフラと自室へ戻って行くマオさん。
無理ないか：

「さ、どうしようかな：話し相手もなくなっちゃったし：」
するとまた誰かが近付いてきた。

「オース！零斗じゃねえか！どうしたんだ、こんな所で？」

クルツさん：マオさんと似たような事言ってる。

「さっき姐さんがフラフラしながら歩いてたもんでよ。なにか知ってるか？」

「ああ、それは、かくかくしかじかこういう訳なんですよ」

フ：クルツさんも啞然としてる。

軽い優越感！

「マ：」

「マ？」

「マジかよ！そんな機体が実在するなんてよ！すっげえぜ零斗！」

「ど、どうも」

肩持って揺らさないで：頭がグワングワンなってる。

「よし！零斗！模擬戦やろうぜ！」

クルツさんは僕の顔の前に拳を突き出してそう言った。

「模擬戦！なんでまた…」

「そりゃ決まってるさ！こんな面白い奴と戦わずにいられるかよ！あのマジンカイザーとかいうのもいいが、こっちは神秘的なもんがある分、断然興味があるな！」

かなり興奮気味にクルツさんは言っている。

「でもどこで：場所なんてありませんよ？」

今デ・ダナンは海中真っ只中、模擬戦やろうにも場所がない。

「くっ：なら今度陸に上がった時にやろうぜ！」

「ん：じゃあ：いいですよ！」

少し悩んだ上僕は模擬戦の約束をしてしまった。
クルツさんの戦い方とかも知りたいしね。

「決まりだ！陸に上がるの楽しみにしてるぜ♪」

そう言ってクルツさんも笑顔のままどこかへ消えていった。

「また：話し相手が…」

まだ会議も終わってないだろうな
とりあえず、僕はグレートマジンガーの様子を見に行く事に。

「……」

僕は所々破損しているグレートマジンガーを見上げ、大切な仲間を傷つけられた怒りが体を駆け巡る。

無意識の内に拳を痛い程握りしめていた。

「君は…確か〱坂井君だったね？」

本日三人目の遭遇者は、弓教授だった。

第三十一話…鉄也一時撤退…

…デ・ダナン格納庫…

「こうして話すのは初めてだね。改めてよろしく頼むよ坂井君」

にこやかに握手を求めてきた弓教授。

うーん…ロボットの博士って、もっとおじいさんっぽい人かと思ってたけど…ちよつとイメージ違うかな弓教授って。

どっちかって言う和学校の先生って感じかな。

とりあえず僕は握手に応じた、ついでに鉄也さんと、グレートマジンガーについて聞いてみる。

「鉄也君ならさっき意識が戻ったよ、ただ…」
ただ？

「グレートマジンガーが倒れた時の衝撃で結構体を傷めてしまったね…当分リハビリが必要になるだろう」

そうか…でも生きていただけても良かったよ…

「グレートもかなりの損傷だね。この艦の設備ではどうしようもない」

「…じゃあ…どうするんですか？」

僕の質問に、弓教授はなにやら、うーんと唸っている。

そこへ…

「それについては提案がありますよ」

テッサ艦長！会議終わったんだ…って事は！？

「よく零斗どこ行ってたんだ？心配したぜ？」

や、ヤバイ…甲児のこめかみが、ぴくぴくしてる…

僕は、少し後ずさりする。

「ちょ、ちよっとお腹の調子が…」

「ほう？さっきクルツが坂井と面白い模擬戦の約束をしたと言っていたが…何故腹の調子が悪いのに格納庫にいたんだ？」

そ、宗介…君はいつでも無表情だよね！

そんな事言ってる場合じゃない！

ドン！

さらに後ずさり、後ろに逃げようとしたが、背中がなにかとぶつかった。

「ヒ、ヒイロ…なんで後ろに…」

退路を失った。

「会議中に逃げ出したのは謝る！でもそんなに怒る事ないじゃないかー！」

逆ギレ大作戦！

「別に怒ってなんかないぜ？ただ、よくダチをあのつまらない空間

においてきぼりにして、のうのうとしていられるな〜と思っただけさ」

笑顔だけど目が笑ってないよ…

「大事なミーティングを抜け出す事が許されるとでも思ったか？これがもし戦闘会議ならば、貴様は作戦内容も知らずに出撃しているんだぞ」

「……」

ヒロはなにも言わないのか…

「ま、まあまあ。相良さんも甲児さんも落ち着いて…一般人には、わかりにくく話した私もいけないんですから…」

ちょっとバカって言われているような気がする。

二人共退き下がってくれたからありがたいけど。

それからテッサ艦長は、軽く咳ばらいをしてさっきの事を話し始めた。

「先程、話し合った結果三つ目の案を実行する事になりました。まずミスリルの上層部に掛け合って今回の案のスポンサーになつてもらいます。それからミスリルを通して日本政府を納得させてから本格的に組織を組み上げて行きます」

へ〜なんか意外と簡単そうだね。

「それで、一度準備の為、私達の基地があるメリダ島に戻る事になりました」

「…それって僕達も？」

「いえ、メリダ島には私達…相良さんを除いたデ・ダナンのクルー達全員だけ…と思ってましたが、弓教授と鉄也さんにも来てもらいましょう」

「ああ！ミスリルの基地ならグレートを直すだけの設備があるもんね！鉄也さんのリハビリもできるし！」

「零斗：鉄也さんがリハビリってどういう事だ？
いつになく真面目な顔になる甲児…」

「あ、うん…僕も詳しくは知らないんだけど…弓教授が、鉄也さんはリハビリが必要ぐらい体にダメージが残ってるんだって…」

「弓教授！それ本当なんですか！？」

「…本当だ…しかし、そう何年のリハビリって程でもない。鉄也君次第だが…」

「そんな…俺のせいだ…」

意気消沈の甲児…僕もあの時サポートに入っていれば…

「過去の事を悔やんでも仕方がない。悔やんだ所で時間が戻るわけでもない。それに命があるだけ有り難い事だろう」

時間を戻す…時斗にはその力があるけど…今は使う時じゃない。
辛いけど我慢する時だ、今は。

「兜」

その場にいた全員が声がした方を見る。

「鉄也さん…」

「鉄也君！まだ君は起きてはいけない！安静にしているよう言った
だろ！」

弓教授がおぼつかない足付きの鉄也さんの元へ。

「弓教授…少し時間を下さい…：兜！あれは俺が勝手にしたことだ
！だから…お前が悔やむ必要はない。それに待っている。次にお前
と会う時は俺もグレートもパワーアップしているから…な」

少々苦しみながらも最後は、微かに微笑みながら甲児に言った。

「あ、ああ！だけど俺もカイザーも負けないぜ！鉄也さん！」

甲児は、ビシッと鉄也さんを指差しそう言い放つ。

「フ…楽しみに…してる…ぜ…」

意識が切れたのかその場に倒れ込む。

「鉄也君！」

「「鉄也さん！」」

弓教授は、倒れた鉄也さんを医務室に運ぼうとする。

僕と甲児も鉄也さんの所へ駆け寄った。

「テストロッサ艦長。メリダ島行きは有り難く承けさせてもらいま
す」

そう言いながら鉄也さんと肩を組む形で医務室へ向かう弓教授。

「…鉄也さん大丈夫かなあ…」
僕はボソツと呟いた。

「鉄也さんが、あれぐらいでくたばるかよ…」

甲児は、医務室へと消えていく弓教授と鉄也さんの姿を眺めてそう言った。

「…では、私達はメリダ島に向かいます。相良さんと零斗さん達はとりあえず今まで通り生活していて下さい。後、相良さんもしこの数週間の間に敵が来た場合は、すぐに連絡して下さい！零斗さんだけでは、辛い場合も考えられますから」

そうか！デ・ダナンが基地に戻るって事はマジンカイザーとかも一緒って事か！

え？ちよつと…マズイな…

「それと、ゼロは置いていってもらうからな」
ヒロが突然口を開いた。

「え？ゼロってあの翼のある綺麗な機体ですよ？隠すのはどうするんです？」
首を傾げる艦長。

「一目につかない場所を探せばいい。それに俺はこの世界に長居する気は毛頭ないからな」

「…そういえばヒロの世界って今大変なんだよね…」

「そうだ。だから今は零斗、お前からの情報だけが頼りなんだが…なにかわかった事は？」

ヒロはこちらに目線を移す。目つき悪いから睨めつけられてるみたいだ…

「…その事なんだけど、時斗は答えてくれないんだ…ゴメン」
ヒロに向かって頭を下げる。

協力だけさせといて、何も知らないってのは酷いと思うから。

「……なあ…零斗？いつも時斗が言ってるのかなんとかって言うけどよ…どういう事なんだ？」

甲児は、不思議そうな顔をしてこっちを見る。

「AIではないんですか？」

艦長は、マオさんと同じような事を言う。

はあ…また一から説明するのか…

「……時斗っていうのは…」

甲児達に時斗の事について軽く説明した。

所々で目を点にしたり、は？とか、ありえない…とか言ってたけど気にしない。「で、まあ…時斗も今は話せないって言ってたから、

いつかは話してくれるんじゃないかな？」

時斗に口止めされて、僕も今は皆に話せない事もあるけど…

「だからヒロ…ゴメン！役に立てなくて」

またヒロに頭を下げる。

「……………なら自分で帰る方法を探す。すまないが俺は別行動をとらせてもらおう。零斗、なにかあったら連絡してくれ、頼んだ」
怒ってる訳じゃなさそうだ…宗介と一緒に無表情だからよくわかんないけど…

そして、ヒロは一人でゼロへ向かって行った。

あゝあ…また仲間が…

僕達は無言でヒロを見送った。

「……では、また後日連絡します。それまであまり目立たないようになしてくださいね」

デ・ダナンから出た僕達は疲れた体を癒すため各自家に向かった。
もう空は真っ暗だ。

何時間あの艦に居たんだろうか？

ヒロは既に見えない。そういえばもう一人の男の人はどうしたんだろう？

はあ…当分一人で戦うのか…でもあのあしゅら男爵とか言う奴、か

なり痛み付けたからしばらく来ないよね！
そう願いたいよ…

第三十一話…鉄也一時撤退…（後書き）

すみません…今新しい小説を書いていて、少し更新が遅れると思います。

何故今新しい小説を書くというと、正直僕は自分の文に自信がありません！

だから、この『時旅』をもっとより良い作品にする為に、別の小説を書いてスキルアップしようと思ったからです！

どうかご理解ください

m () m

く第三十二話：悪を断つ剣とサングラス男？く（前書き）

久しぶりの投稿になります！

少し世界を変えて見ました。

ちなみにサングラス男はトロンベの方ではありません！

第三十二話：悪を断つ剣とサングラス男？

「????」

どこまでも続く荒野。

周りには木々などはなくただただ砂と岩盤が延々と続いているだけだ。

しかし、その茶色だけの世界に異常な程に紅い物体が動いていた。周辺には何人かの人も見られる。

「兄貴ー！ホントこっちの道でいいのー？」

紅い物体の正体は巨大な人の形をしたロボットで、あまりにも妙な風貌である。

全身が真っ赤に染まり、胸には大きな顔があり黒いサングラスを掛けている。

頭は普通に人型だが額には三日月のような物が飾られている。

「おうよ！道無き道に行くのも男ってもんだ！」背が小さく、ズボンと服を一枚羽織っているだけで、頭にゴーグルをつけた少年。

その少年に兄貴と呼ばれた男は、少年に比べかなりの長身でこれまたズボン一丁だけという薄着である。

体のあちこちに青い入れ墨がしてあって、手には日本刀が握られている。とんがったサングラスもしていた。

「また馬鹿みたいな事言っていないで、さっさと人が住んでそうな所見つけないと、私達このまま飢え死によ！」

紅いロボットの肩には、一人の女性が乗っていた。

赤く長い髪を後ろで縛り、服装はかなり露出度の高い服だが、片手にスナイパーライフルのような物を持っている。

先程の二人は、どうやら紅いロボットの中にいるようだ。

「しかし、ホントなんもねえな。あー退屈だ！ガンメンでも出てこねえかな」

兄貴と呼ばれる男が足を組み、退屈そうにそう言い放った。

「兄貴…：そんな事言って本当に出て」

ドオオオオオオン！！

ゴーグルを付けた少年の声は、激しい轟音で掻き消された。

紅いロボットの目の前に突如、巨大な“ なにか ”が落ちてきたのだ。

「オ！来たぜ来たぜ！悪党ガンメンのお出ました！」

兄貴と呼ばれる男は、さも楽しそうに言い放つ。

「カミナ！」

赤い髪の女性が、おそらくだが人の名前叫ぶ。

「オウ！ヨーコはどっかの岩影に隠れてな！」

どうやら兄貴と呼ばれる男の名はカミナで、赤い髪の女性はヨーコというらしい。

「行くぞシモン！」

ゴーグルを付けた少年はシモンという名らしい。

砂埃は風に流され、落下物の正体が目視できるようになった。

落下物…それは灰色の外装の巨大な“顔”だった。

それとなく紅いロボットの胴体に似ている。

「兄貴、あらかじめ合体させといて良かったね！」

「ま、あれはあれで見せ場なんだがな」

二人には、敵が眼前ににいるというのに余裕が見られた。

「グレンラガンの力ア！特と見やがれエ！！」

カミナの掛け声と共に、シモンは目の前に差し込んであるなにか捻る。

すると、目の前の画面が緑に光り輝き始めた。

「兄貴！パワー全開、行けるよ！」

「おうよ！」

カミナは“グレンラガン”を操縦し、右手拳を敵にぶち込む。

その衝撃で敵はよろめき、続けてグレンラガンは蹴りを一発。とてもロボット同士の戦いとは思えない格闘戦だ。

「このまま押し切るぞ！」

一方的に攻めるグレンラガン。

だが・・・

ドシャアアア！！

「あ、兄貴！」

突如地面からもう一機敵が現れたのだ。

グレンラガンの背後に現れたそいつは、そのままグレンラガンを羽交い締めにした。

「くそ！シモン！もっと出力あげろ！」
なんとか逃れようとするが、敵も必死に抵抗し、なかなか剥がれない。

「ダメだ！全然上がらない！」
出力を上げようとするが、全く上がる気配がしないグレンラガン。
その間に倒れていた敵が起き上がってきた。

『このお！よくも俺様の“ガンメン”を』
怪物から、男のだみ声が聞こえる。
この怪物はガンメンというみたいだ。

『そのまま押さえておけよ！』
最初のガンメンが、さっきのお返しと言わんばかりに強烈な一撃を
グレンラガンに喰らわす。

「「ぐわあああ！」」
衝撃に耐え切れず二人共声をあげる。

『へへ、これで真っ二つにしてやるぜ』
灰色のガンメンは腰にある巨大な斧を手にして、目の前に構える。

「……冗談きついで」
その巨大な斧を目にして思わず苦笑するカミナ。シモンは、いまだ
に出力を上げようと奮闘している。

「危ない！」
岩影に隠れていたヨーコが叫ぶ。
同時にスナイパーライフルでガンメンの手を撃った。

しかし、ほんの少しよろめいただけで全くダメージを受けた様子ではない。

それどころか、灰色のガンメンはヨーコに狙いをつけ、こっちに向かって来たのだ。

「ヨーコ！ 離せクソガンメン！」

さらに暴れるグレンラガン。

しかしガンメンの拘束は外れない。

「ヨーコ逃げて！」

シモンも叫ぶ。

ヨーコはライフルを畳み、すぐさま走り出す。

だが、巨大なガンメンから逃られるはずもない。

このままガンメンの犠牲となるのか…と思いきや。

今度は空が光り始めた。

「なんなの？」

その場にいたガンメンを含め全員が空を仰ぐ。

すると、渋い男の声が聞こえた。

「…我が名はゼンガー…ゼンガー・ゾンボルト！！ 悪を断つ剣なり
イイ！！」

空から黒い影が落ちてきた。

その影はガンメンの大きさをも凌ぐ大剣を持っていて、落下と同時にヨーコに襲い掛かろうとしていた灰色のガンメンを一刀両断…切り捨てた。

『ぐわあああ！ ありえねえええ！』

ガンメンの中で断末魔が響く。

その様子に驚いたグレンラガンを拘束していたガンメンの力が緩んだ。

「いまだ兄貴！」

「よっしゃあ！」

パワーを取り戻したグレンラガンは、ガンメンを振りほどいた。

そして信じられないが、拳をドリルに変えガンメンに叩きつけた。その一撃で木っ端みじんとなったガンメン。

「終わった…！」

シモンは戦闘が終わると、肩の力を抜きホッと息をつく。

「今回は、すこ〜し危なかったな」シモンは、口には出さないが（絶体絶命の大ピンチだった…）

と思っていた。

「んで？ありゃ誰だ？ガンメンには見えねえが…オイあんた誰だ？」
カミナは率直に尋ねた。

「名乗る程の者でもない」

シモン、ヨーコは同じ事を思う。

（さっきおもしろい名前乗ってたじゃん！）

カミナは…

「いや、名乗ってもらおう！アンタは漢だ！俺の名前は、あ！泣く子も黙るグレン団の大將カミナ様だアア！！」

豪快に自己紹介をするカミナ。

シモンとヨーコは呆れ顔で、やれやれと言っている。

「む、ならば名乗ろう。我が名はゼンガー…ゼンガー・ゾンボルト
！」

こちら豪快に名乗る。

「ゼンガーだな。よしゼンガー！アンタもこれでグレン団の仲間い
りだアア！！」

「よろしく頼む」

「「……………」」

もはや、ついて行けないシモンとヨーコであった…

第三十三話…新たな冒険…

…荒野…

ゼンガーと名乗る男の機体は、まさに武士のような容姿をしていて、さっきの大剣は普通の刀と同じサイズになっている。

「ほ…じゃアンタは異世界から来たのか」

カミナが納得したかのように言った。

どうやらゼンガーも別の世界から転送された者らしい。

「今回を含め、異世界へ飛ばされるのは俺は三回目になるな」
ゼンガーは目を閉じ今までの事を回想をしながら話す。

「一回目は俺が居た世界の仲間達とだ。アインストというもののけの世界に飛ばされた…その時は、奴らの大将を倒した後に元の世界へと戻る事はできたがな」

「ねえ…その話…本当なの作り話じゃなくて？そんな別世界に行くだなんて…」

「フ、現にこうして来ている」
ゼンガーはヨーコの問いに、さも当然の事のように落ち着いた様子で答える。

「……………」

しばし、沈黙が流れた。日も沈みかけ、先程の騒動が嘘のように辺

りは静かだ。

そんな時ヨーコは席を一人立ち、少し離れた所でシモンを手招きする。

無言で呼ばれたシモンは、訳がわからない顔をしてヨーコの元へ歩く。

「なに？ヨーコ」

シモンは自分が呼ばれた訳を彼女に尋ねる。

二人が席を離れた事で、またカミナはゼンガーに話し掛け始めていた。

「ねえシモン：あの男の人信用できそう？」

ヨーコはシモンの質問に答える代わりに、ゼンガーの事についてシモンに聴く。

「え？信用できるって……でもアニキは信用してるみたいだけど……」突然の質問におどおどしながら答える。

ヨーコは少し警戒心を持っているようだが、シモンはそれほどゼンガーを警戒していない。

それは、ゼンガーのあの悪くはないどこか独特な雰囲気のせいか、それとも自分が信頼しているアニキが親しみを持ってゼンガーと話しているせいか。

「そう：でもあのロボットなんなのかしら？グレンラガンに少し似てるかな？」

ヨーコは話題を変え、グレンラガンと並べて置いてあるゼンガーが乗っていたロボットを見上げる。

そのロボットは、一言で表すと武者のような容姿で、全身を日本の鎧のような装甲を纏っている。肩部分は異常とまでは言えないが、かなり大きい。

それほど重量級には見えない、だがさっきの戦闘で使用したような超巨大な剣を振り回す程の力を持っているみたいだ。

「ガンメンにしては、少し小さいよね？それに人間みたいな頭もあるし：やっぱり異世界から来たんじゃない？」

この世界にあるガンメンというロボットは、たいてい胴体部分に顔が存在しており、グレンラガンは二機のガンメンが合体してあるため、あくまで例外。

「まあ、いいわ。あの人がもし悪人だったら、その内化けの皮が剥がれるでしょう」

私は寝るから、と言ってヨーコは一人夜の闇に消えていった。

一人残されたシモン。

すると、カミナが

「おい、シモン。そろそろ戻って来いよ！コイツの話おもしろいぜ」

「あ、うん！」

シモンは、再びカミナ達の元へ駆け足で戻る。

~~~~~

～陣代高校～

「待てボス！貴様、訓練をサボる事は許さんぞ！」

「うるせい！あんな地獄のような訓練やつてられっか！」  
場所は陣代高校の廊下、宗介は、小型銃（ゴム弾）を構え、安全保障委員会としての訓練をサボろうとするボスを追跡していた。

あしゅら男爵との闘いから数日、その間とくに何事もなく平和な日々が続いていた。

ただ、零斗を含む甲児、ボスは毎日宗介による特訓を課せられていた。

その様は全ての生徒が見て見ぬふり、目を背けたくなるような過酷な物であった。

しかし、宗介のストッパーであるかなめだけは止めに入っただが、ボスはともかく零斗と甲児は俄然やる気で、自ら進み宗介の特訓を受けていたので、かなめもやむを得ず黙認する事にしたのだった。

「ボスの奴、根性ねえな」

「はは…でも僕も正直キツイよ…だって体のあちこちが悲鳴あげてるもん」

「そりゃ同感だ…」

学校中を逃げ回るボスと、それを追い掛ける宗介の姿を傍観しながら二人は呟く。

特訓の疲れのせいか二人共声にいつもの覇氣がない。

「ちょっとトイレに行ってくるぜ、先に校庭行っててくれ」

「了解」

特訓は放課後校庭で行われている。

その際、宗介はたまに銃を乱射したり変な器具を持ち込んだりするので、最近は校庭で活動するクラブの人達は別の学校のグラウンドを借りている。  
かなり不憫だ。

「さて、先に準備運動ぐらいしておこ」  
零斗が校庭に向かって歩き出した瞬間。

《零斗、すまないが少しの間付き合ってもらおうぞ》

「へ？」

キーーーーーン

「うわあああああ!？」時斗の声が響くと同時に、零斗はもう見慣れたあの光の中へと引きずり込まれていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7914f/>

---

時旅～トキタビ

2010年10月21日23時04分発行